

# 2D DREAM MAGAZINE

ご主人様への忠誠の証 貴方にも見せてあげる

2017 **04** Volume.93  
DIGITAL EDITION

# 悪堕淫紋

今号の  
Special Talkin Series  
特集

- 【連載&読み切り小説】
- 新居佑 × 左藤空気
  - ウナル × 田嶋有紀
  - 天草白 × かゆみ止め
  - 桃生雨京 × ねむ
  - 狩野景 × 阿呆宮
  - 江口ヒロヨシ × 魁李
  - 磯貝武連 × 梶森
  - 酒井仁 × 桐嶋サトシ

【えっちマンガ&4コママンガ】

- 一弘 ユズリハ**
- ばふえ
  - 零覇
  - 時丸佳久
  - 楠木りん
  - 嘉納あいら

カラー  
ピンナップ  
COLOR PINKUP



松波留美 / 大林森 / 左藤空気  
うるし原智志

表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス

新連載

Web小説の人気作が全編加筆で連載スタート！  
**装刃戦姫サクラヒメ**  
有機企画 × 緑木邑

## 試し読み版

18 未満





# ダークプリンセス♥ エステル

洗脳淫紋で悪堕ちビッチ化した王女

小説  
NOVEL

あら い ゆう  
新居佑

挿絵  
ILLUSTRATION

さとうくうき  
左藤空気

浮かび光る裏切りの証！  
聖魔法の王女が誓う  
悪への離反！！





「だ、誰か助けて……っつ！」

大国として名高いゼルディック王国。

その辺境に位置する街は今、突如現れた一人の魔族によって、壊滅の危機にさらされていた。

「あははっ、逃げなさい。私を楽しませるのよ、下等で愚かな人間どもっ！」

必死に逃げる少女を、楽しげに追いかける魔族。ネイトは、伝承によれば、数百年前に悪逆の限りを尽くしたのちに封印された、稀代の悪魔である。

ピッチリとしたエロティックなボディスーツに身を包み、背中から蝙蝠のものに似た翼を生やしたその姿は、完熟しきった淫魔のフェロモンを隠すことなく放射している。

長い年月封印されながらも、力を蓄えてきた魔族は、ついに復活の時を迎え、数々の街や村を廃墟と化してきたのだ。

「この国の人間には恨みしかからねえっ。気のすむまで復讐させてもらうわあっ！」

「あはあ、あうっつ！」

かなりの時間走り、弄ばれてきた少女は、ついに足を絡め、地面に倒れ伏してしまふ。

「ああら、残念。それじゃあ、あなたもすぐに、みんなと同じようにしてあげるわ……あははっ。ふっつ！」

ネイトのポリウムたつぷりのお尻から生える尻尾が、鋭利な槍のように女の心臓へと伸びる。もはや絶体絶命と、少女が恐怖に瞳を閉じた瞬間……。

「させませんっ！ ホーリーシュートっ！」

ギンッつ、と少女の背後から放たれた白い光の矢が、伸びた尻尾を打ち弾く。

「あ、あなたは……ひ、姫様っ！」

「もう大丈夫です。さあ、早く避難を」

颯爽と現れ、少女を逃がした少女の名はエステル。リ・ゼルディック。王国の第一王女であり、大陸随

一の聖魔法の使い手だ。

すらつとした細身というよりは、ぶにっとしていて男好きするプロポーション。

街の中だというのに、豪華な純白のロングドレスを着て、凛と振る舞う姿は、庶民とは明らかに違う気品と優雅さに溢れている。

愛らしくも、ふくよかで肉感的な若々しいボディをもつ外見でありながら、厄災の原因である数々の悪魔を屠り、人々を救済してきた、姫巫女である。心優しく、臣民の信頼も厚い彼女は、王国の宝石とも呼ばれる、美しい姫君なのだ。

「お前が破滅の悪魔ネイト。よくも我が国の民たちを……っ」

「へえ、あなたが噂の王女様？ うふふっ、何百年ぶりに自由になったのよ。人間の百人や千人殺しても、まだ物足りないわ。ねえ？」

「この国の王女として、魔を滅する巫女として、ネイトっ！ お前を野放ししておくわけにはいきませんっ！ 邪悪なる魂に永遠の縛めをつつ！ ホーリーウォールっ！」

エステルの持った神聖なる破邪の杖がまばゆく輝き、一筋の光が天を突く。そして光は束となり、やがて巨大な光の壁を作り出し、蘇ったネイトを四方から包み込む。

「くっ、この強力な聖気っ！ ふ、うふふ。私を封印するには十分な力を持つているようね。あはあ、よかったわ。あなたが、女でねえ……っ！」

エステルが放った強大な破邪魔法によって、ネイトは光の中に封じ込められたかに見えた。しかし、闇の眷属が不気味な笑みを浮かべた刹那、エステル

の足元の地面が裂け、そこから猛烈な瘴気が噴き上がって、麗しの姫巫女に覆いかぶさっていく。

「うぐっつ、愚かな。この程度の瘴気でやられるほど私は軟弱では……っ!? なっ、あなたたちは……」

っ!?

瘴気をはね除けようとした瞬間、エステルの目に飛び込んできたのは、廃墟となった街に住んでいただろう、若い女性たちの姿だった。しかもその中には、先ほどエステルが逃がした少女まで含まれている。

彼女たちの衣服は、ネイトのものによく似た黒い光沢のボディスーツだ。そしてその瞳に生氣はなく、胸をゾッとさせるほどの悦楽の色で染め上げられている。

悪魔に操られている……。そう理解したときには、すでに時遅く、ネイトが自身の漆黒の翼から放った無数の触手が、エステルの両手を宙に縛り上げる。

「くっ、まさかすでに街の人々を傀儡にしていたなんて……っ」

「だつて私はネイト。淫魔、ですもの。男はその生氣を吸い取り、女は身も心も調教改造して、私の忠実な牝奴隷に仕立て上げる。うふふ、王女エステル……それほどの聖魔法の使い手であるあなたなら、とびつきり上等の眷属になりそうねえ」

息をのむ美しさを誇る淫魔が、そうサディスティックに笑うと、操られた女性たちが、エステルが着ている法衣をビリビリと破り取っていく。

腹部と長いスカート部分が無残に破り取られ、育ちの良さがうかがえる、雪のように白く美しい肌が、淫魔の前に晒される。

「教会で祝福された対魔法衣がこんなあつさり……っ。くっ、私を眷属にですって？ 私が魔族に手を貸すわけではないわ。そんなことになったらこの国は……っ」

「っつ！ 私の命に替えてでも、あなたを倒すわっつ！ はああっつ！ ファイナル・ブレイズっつ！」

「ば、ばかなっつ！ 自分を犠牲にですってっ



っ!?"

王女として、愛するこの国を守るため——自らの生命を燃やし尽くす必殺魔法の輝きが、操られた少女たちを吹き飛ばし、巨大な光球となって、淫魔めがけて放たれる。しかし——。

「なあ〜なんてねえ。ざあんねん。どれだけ屈強な騎士も、高潔な神官も、気高いお姫様だつてねえ……。しよせん女である限り、淫魔がもたらす快楽に、勝てるはずないんだからあ」

光珠がネイトを包み、焼き尽くすより早く、彼女の長い爪が、露わになったエステルの腹部の前で、不可思議な弧を描く。

瞬間、ちよど子宮の上あたりが、血液が沸騰したかのように、カアツと熱くなり、猛烈な淫気の高まりとともに、エステルの柔肌に、妖しい光を放つ紋様が浮かび上がってくる。

「こ、これは……っつ。まさか……っつ!?"

伝承で聞いたことはある。高位の淫魔が操るといふ、魔性の淫紋。その効力は刻みつけられた人間の性欲と性感を数十……数千倍にまで高め、女の理性を快楽で破壊し尽くし、淫魔の忠実な奴隷へ堕としてしまうという恐ろしいものだ。

「さあ、めくるめく快感をたっぷりと味わいなさい。そして我が最強のシモベへと墮ちるのよっ!」

ネイトの声と同時に、淫紋が一気にその呪力を増大させる。

それは女の悦びなど全く知らず、人々の幸せだけを思い戦ってきたエステルにとって、想像を絶する、牝の快感の波動だった。

「ひいっつ、ぎいひいひいんっつっ!」

破れかけの法衣をまとったエステルの魅惑的な身体が、まるで落雷を受けたかのように、ピクンンッ! 大きく伸びあがる。

可憐な唇からは、とてもさつきまでの凛々しい巫

女のモノとは思えぬ、野獣のように盛大な嬌声が、本人の意識とはまるで関係なく、ただ活性化された牝本能に従って吐き出される。

確実に淫魔を倒せたはずの必殺魔法は、その目的を果たすことなく、哀しく霧散してしまう。

(な、なんなのこれはあつっ!?! この感覚ううっ!?! 私にいったいなをおおっつ!?)

気づけば、無意識のうちにエステルの身体が仰向けになっており、ムチムチした両脚が卑猥で惨めなガニ股に開ききっている。

腹部に刻まれた淫紋を中心として、身体全体が信じられない灼熱に覆われている。

グツグツと煮えたぎる子宮の感覚は、しかし決して悲痛なものではなく、むしろ指の先にまで広がる、圧倒的な甘美な……性的な快感を、エステルの脳髓に焼きつける。

「あらあらあつ、すんごい反応。ちよつとやりすぎちゃったかしらあ。それとも、元々淫乱の素質があつたつてことなのかしら?」

クスクスと笑う淫魔は、その細長い指を、魅惑的なガニ股をキメているエステルの股間へと伸ばし、熱く煮えたぎっている……まだ本人ですら触つたことのない、王女の秘室へと、指先をジユクジユクウツ! と挿入する。

「ほおううっ!?! おおっつ!?! な、なにいつ!?! 淫魔の指つ……私のアソコ……やめっ。今すぐやめなさい、いいひいひいんっつ!」

理性が状況に追いつくより早く、限界を超えて無理やり高められた淫欲が、激しい初潮吹を見せつける。

「んっつほおおっつ!?! おおおんっつ!」

野太い牝のイキ声とともに、ジョババババアアアッ! とまるで放尿のように大量の濃いラブスブラッシュが、ネイトの指と自身の太ももを汚し、地

面にびちゃびちゃとぶちまけられる。

「ふいっつ、ほおおっつ……お、お……っつ!」  
事態に対処などできる余力はなく、聖魔法に関しては、圧倒的な実力を誇るエステルも、ガクガクと太ももを痙攣させる。

憎き魔族のたつた一本の指による快感の爆発に蕩けきつた表情は、屈辱と果てしない気持ちよさにはあはあと熱い吐息を漏らし続ける。

「今のが絶頂……イク快感よ。うふ、なんにも知らない初心だったことが裏目にでたみたいねえ、お嬢様♡ でもまだこれからよ。あなたのその可憐な理性、完全に快楽に塗り替えさせてあげるわあ」

指についたエステルの愛蜜の味を、口の中で丹念に味わうネイト。その余裕たっぷりの仕草に、たまらない屈辱を覚えてしまう。

(イ、イク……? こ、これが淫紋の快楽……っ。すすごすぎるわ……っ。でも私は絶対に……諦めないっ)

非道な淫紋によって、生まれて初めて味わい、意識させられた己が持つ女の性。

性欲が暴走して、頭がうまく回らない。快感で痺れきつた筋肉は、生まれたての子鹿のようにブルブルと震え、立っていることさえ困難だ。

しかも自分が感じれば感じるほどに、淫紋の呪縛は強くなり、心までも淫らに染まってしまふ。

だが、このまま快楽に溺れるつもりはない。王女の誇り高いプライドを胸に、淫魔をきつく睨みつける。

「へえ、いいわねえその目つき。けど淫紋の本当の快楽はこれからよ」

ネイトの切れ長の瞳が妖しく光ると、お腹の淫紋も呼応して紫色の輝きを放つ。

「あつ、くうっ。そんなこままでの力が……っ!?! か、身体が勝手にいっつ!?!」





サクラヒメ、推して参る！

装刃戦姫  
**サクラヒメ**  
フタナリ淫獄に墮ちる黒髪乙女

第一回 サクラヒメ魔淫に墮つ

小説 NOVEL 有機企画 ゆう き き かく 挿絵 ILLUSTRATION 緑木邑 みどりぎむら



草木も眠る丑三つ時。

夜闇が人の世を黒く塗りつぶし、湖面が満月に光をたたえる。人々は床につき、街は静寂に包まれていた。聞こえるものといえば木々のざわめきと虫の鳴き声くらいだ。

そんな夜更けに一人、山中にかかる鉄橋でトラブルに見舞われた女性がいた。運転していた軽自動車は柵にぶつかって停車し、ボンネットから黒い煙を噴き上げている。

彼女は車のそのすぐそばで焦燥に駆られていた。会社帰りのスーツはどこぞ破れ、何度もスマートフォンを指でなぞる。

「どうして!? どうして繋がらないの!?!」

事故を起こしたうえに電波が圏外で、立ち往生しているように見えるがそうではない。二日ぶりに帰宅する彼女を待ち受けていたのは、百鬼夜行絵巻で描かれているような悪鬼だった。

「ムダムダ。封鎖結界を張らせてもらったからよ。ま、人間に言っても理解できないだろーがな」

「ヒッ! こ、これって現実なの? じ、冗談でしょ!?!」

「どっちでも好きな方を選んでいいぜ。結果はこのオレ、牙囃さまの晩飯一択なんだからよ」

女性の前に立つのは大型トラックほどもある巨大な蜘蛛の化け物。闇に紛れて人を喰らう妖魔、オニグミだ。古来から不審死や行方不明者の大半は彼らが原因であり、人知れず人間をエサにしているようだ。

「若い女の肉は美味いんだよなあ。ゲへへ、骨の髄までしゃぶらせてもらうぜ」

「い、いや……だれか助けて……お願いだから……」  
顔面蒼白で歯の根が合わない女性。助けを呼ぼうにもここは山の中。連絡もできず術がない。

牙囃はその様子に舌なめずりし、トラバサミめい

た顎を開いた。口内からは腐臭の混じった吐息がこぼれる。

「だ、だれか……だれかああああああアツ!」  
「いただきまああす!」

一息に飲み込もうとする大蜘蛛。

だが、絶体絶命の瞬間、一本の小太刀が投擲された。それは牙囃の額に突き刺さると青白い雷光を放つ。

「ギャアアアアツ!! な、なんだこりやアツ!!」

突然の一撃に痺れながら叫ぶ。慌てふためく悪鬼の前に音もなく、一人の少女が現れた。

「抵抗できない女性を狙うとは……恥を知れ」

ロングの黒髪を風になびかせ、セーラー服を着こなす。月明かりに負けない美貌だが、切れ長の双眸はあらゆる者を拒絶するかのよう鋭い眼光を放っていた。しなやかな肢体だが、胸部はかなり豊満で、さらしで押さえられた肉穂が息苦しそうである。

美少女と言う言葉を体現したような少女だが、ただ者でないことは明らかであった。化け物を前にわずかな揺らぎすらない。

「その靈力……まさか……まさかテメェ!」  
「神器転身!」

少女は胸元から深紅の結晶を取り出し言霊をこめる。結晶は戦う意志を受け止めると、まばゆい閃光を放った。

直後、鉄橋は太陽のごとく輝かしい光に包まれた。セーラー服が分解されると墨色の甲冑に再構築。柔らかな胸乳を除き、上半身に装着される。下半身には緋色のミニスカートが出現し、可憐にひらめく。手には籠手、足にはすね当て、肩には袖などの具足、頭には兜の角をモチーフにしたヘッドギアを纏う。瞳の色は黒から赤へ変わり、歴戦の武将のごとき眼光を放つ。最後に身の丈三倍はある大太刀「風明刃」を両手で掴み、少女は白刃を煌めかせ名

乗りを上げた。

「人に仇なす悪鬼羅刹よ塵芥に還るがいい! 魔を断ち祓うは神器の刃! 装刃戦姫サクラヒメ、推して参る!」

そう、彼女こそ破魔の力を秘めた神器結晶で転身する姫武者。オニグミに對抗し、人の世を守るために生み出された変身ヒロイン、装刃戦姫なのだ。

「チッ、面倒くせえ。いいところだったのによお!」  
食事を邪魔され怒りに震える牙囃。激しい怒気で空気が歪む。

「オレがだれだかわかってんのか!? 八大鬼は鬼蜘蛛をつかさどる牙囃さまだぞ! テメェなんぞ五秒でゴミクズにしてやるぜ!」

八大鬼とはオニグミを束ねる幹部の名称である。その力は圧倒的で幾人もの装刃戦姫が敗北を喫してきたのだが――

「それがどうした。八大鬼など何度も切り結んでいる。貴様はあの鬼蛙よりも強いのか?」

「鬼蛙……クソッ! あの根暗野郎、ガキを凶に乗らせやがって! いいぜ、相手になってやらあ!」

微塵の動揺も見せない少女に本能が警告を告げる。だが、鬼が人を恐れることなどあつてはならない。死神の鎌のように八本脚、その先端に生えた爪を肥大化させる。幹部である自分が負けるわけがないという自信もあった。

「死ね死ね死ね死ね! 死ねえええええ!」  
凄まじい速度で三百六十度、全方位から爪が襲い

かかる。一撃、一発が鋼鉄すらも引き裂く鬼の爪だ。サクラヒメは身じろぎ一つせず牙囃は勝利を確信する。

「もらったアツ!」  
自信家の悪鬼は気づいていなかった。相対する敵が並みの戦姫ではなく、日本対魔協会において最年少で神器結晶に適応した最強の戦姫、装刃戦姫サク

ラヒメであるということ。

「愚かな」

身の丈以上の大太刀が目にも止まらぬ速さで振るわれると、脚の一本が斬りおとされた。その衝撃と痛みで残りの爪も空を切る。

「ガッ!? な、なにイイイ!?」

「遅いつ! ハアアアアアアアッ!」

刃が閃き、続けて二本、三本、四本と脚が斬りおとされていく。紫色の体液が噴き出しては地面を汚す。

「ぎゃアアアアアッ!? あ、脚があああああ! オレの脚があああアアアッ!」

「ピーピーわめくな、みつともない。貴様それでも八大鬼か?」

「こつ、こつ、この糞女がッ! なめやがッ! 許さねえええエエ!!」

殺意を全開にして爪を叩きつける牙囁。だが、力の差は歴然だ。白刃が舞い踊るたびに体液が飛び散り、五本目の脚が斬りおとされた。

「弱者イジメはできても戦はできないようだ。鍛錬がまったく足りていない。このままダルマになるまで続ける気か?」

「ガッ! がああアア……! くそッ! くそッ! こ、ここは一先ず退いてやるぜ! 次に会った時がためえの最期だ覚えてやがれ!」

たまらず尻から吹き出した糸を木々につなぎ留め、巻き取り彼方へ離脱しようとする八大鬼。

「ハッハッハアッ! またなメスガキ!」

封鎖結果も解除し、なけなしの虚勢で装刃戦姫を挑発する。弾丸めいた速さでこの場から遠ざかっていく。

しかし、サクラヒメは鬼のように跳ね、すでに牙囁の上をとつていた。

「次? 貴様に次などない!」

「ナッ!? なにイイイイ!」

甲冑を纏っているとは思えない電光石火の早業。鬼の動体視力でも追いつけないスピードだ。

姿を捉えた時にはもう遅い。空中で急な方向転換ができずに狼狽する牙囁。数秒前までの余裕はもうどこにもない。

「ま、待て! 待ちやがれ! そ、そうだ! あの女はあきらめる! それに欲しいものは何でもやるから見逃してくれ! に、人間は金が好きなんだよな!!」

「黙れ」

「オ、オレ様は他のカス共とは違う! こんなことで死ぬ定めじゃねえ! ねえはずだ!」

「黙れと言ったはずだ見苦しい! 消え失せる鬼蜘蛛!」

「ひっ、ひいひいイイ! いやだいやだいやだあッ! 幹部になったばかりなのに! こんなガキに! いやだああアアアアアッ!!」

悪鬼の命乞いに貸す耳などあるはずもない。満月を背に、風明刃が振るわれる。灵力で刀身が青白く光ると、斬撃が幾重にも重なり牙囁の身体を切り裂いた。

「討滅興義! 花鳥風月・百八式!!」

「ギャアアアアアアッ! アアアアアアッ!」

牙囁の身体が百八つに分割、闇の魂が浄化されると完全に消滅した。

刃から体液を払うと鉄橋に舞い立つサクラヒメ。残心を決めると女性へ近づき、額に触れる。

「今夜あったことは悪い夢だ。何も気にすることはない」

「え、あなたは——」

その言葉を最後に眠りに落ちる女性。神器結晶の能力で記憶の消去をおこなった反動だ。スヤスヤと寝息を立て、目が覚めた時にはすべて忘れていた。

ろう。

身体に異常がないことを確認すると、サクラヒメは対魔協会に連絡を取り、事後処理班を寄こすように伝えた。

後の面倒ごとは彼らがやってくれるだろう。(父さま、母さま、また一体鬼を斬りました。八大鬼、鬼蛙の首までもう少し。二人の無念、必ず晴らしてみせます)

亡き両親に思いをはせ、帰還する装刃戦姫サクラヒメ。月光に浮かぶその姿は一振りの刃のように煌めていた。

◆◆◆

「おはよう!」

「おはようございます!」

校門から快活な声が聞こえてくる。ここは岩戸学園。昔ながらのしきたりを重んじる古風な学園だ。文武両道をモットーに多くの学生が青春を謳歌している。

「建宮会長! この資料はどうしたらいいでしょうか!」

「ああ、そこに置いておいてくれ。後でチェックしておく!」

「はい! ラジャーです!」

体育会系の男子学生が資料を机に置き、ダッシュで教室を後にする。建宮会長と呼ばれた女学生はやれやれといった様子で肩をすくめた。

装刃戦姫サクラヒメこと建宮流華は学園に通う学生だ。生徒会長と剣道部部长を務め、二足のわらじに忙しい毎日を送っている。

「ふう、それにしても今日は日差しが強いな」

窓から差し込む太陽は早朝からキラキラと輝き、欲しくもない熱線を存分に振りまいていた。季節は夏。七月初旬。今年もまた暑くなりそうである。



流華も衣替えを行い、セーラー服も半袖だ。無地のスカートは少し短めで、抜群のスタイルと合わせて清涼感と、透き通るような美しさを同時に体現していた。黒髪が風になびく姿に男女問わず見惚れてしまう。

と、そこへ男学生が現れた。

「おはよう。今日も暑くてゆで上がっちゃうよ」

「おはよう良平。しかし、これしきのことです泣き言をいってはいかんぞ。心頭滅却すれば火もまた涼しだ」

「あはは、建宮さんはいつも元気だね。夏バテしているところなんて見たことないよ」

「鍛えているからな」

声をかけるのは流華の幼馴染にして恋人、三城良平。丸メガネをかけた小柄な少年だ。

流華と同じ剣道部に所属し腕前はイマイチだが、人のことを思いやれる心のやさしい少年である。

両親の死で街を離れていた流華と岩戸学園で再会し、最近交際を始めたばかりである。

「そういえば、ぼくの剣道の腕ってどのくらいなの？ 建宮さんを十としたらどのくらい？」

「〇・五といったところだな。相当に鍛錬が足りていない」

「う、まだまだ先は長いな」

「ふふ、わたしを守るんだろ？ ならばもっと精進しないとな」

少年の想いに口元を緩める黒髪乙女。二人で過ごす時間は戦いのつらさを忘れられる大切なひととき。流華にとって彼は日常の象徴だった。

これだけは絶対に壊したくない。

入学してから復讐のためだけではなく、装刃戦姫サクラヒメとして良平や学園のみんなの平和を守りたいと彼女は考えていた。

しかし、自らが装刃戦姫であるとは絶対に口には

できない。言えは周囲の人間をオニグミとの死闘に巻き込んでしまうからだ。

牙囃との戦闘も靈力を速度に集中させていたから勝てたが、見た目ほど楽な勝利というわけではない。神器結晶を酷使した反動で筋肉痛がひどいが、痛みを隠して気丈に振る舞う。

「しかし、建宮さんではなく流華だろう。わたしは恋人同士なのだぞ。そんな他人行儀でどうする」

「でもまだ名前呼び捨ては慣れないって言うか……」

「う、ちよっと恥ずかしい……」

「良平、大和男子だろシャキッとしろ！ ほら、りゅ・う・か・だ。りゅ・う・か」

「り、りゅ……か……」

「声が小さい！」

「りゅ、流華っ!!」

「うむ！ それでこそわたしに認めた男だ」

突然大声でクラスメイトの注目を集めてしまうバカップル。気弱な良平はモジモジと赤くなっているが、彼女はとて満足した様子である。

「きつ風のいい建宮会長は人の眼など気にしないのであつた。」

◆◆◆

放課後。

部活と生徒会長としての業務を終えた流華は一人で街を歩いていた。良平と一緒に帰らないのはオニグミのパトロールも兼ねているからだ。

西の空が茜色に染まり、日の落ちるこの時間帯は悪鬼たちの起床時刻でもあるのだ。

「うむ、特に異常はないな。そろそろ家に帰るか」

ひとしきり街を探索した後、自宅であるマンションへ戻ろうとする黒髪乙女。

だが、帰路の途中で神社にさしかかった瞬間、急速に膨れ上がる妖気を感じた。

神器結晶に靈力をこめ、装刃戦姫サクラヒメに転身する。

禍々しい気配に全身が粟立つ。

（この妖気……アイツ以外にありえない……!）

急ぎ鳥居をくぐって石段を駆け上がり、境内に到着する。広々とした敷地の奥に賽銭箱の置かれた拜殿が見えた。周囲に人の気配はまったくなくない。

妖気は確実にここから漂ってきていた。

「そこにいることはわかっている。姿を現せ！」

「せつちかなどころは変わってないねサクラヒメ。牙囃を倒したからちよつとは成長したと思っただけだ」

ぐにやり、と石灯籠が歪み鬼が出現する。同時にこの世を隔離する封鎖結界が起動し、空が血のように赤く塗り固められた。

「黙れッ！ 貴様のたわ言に付き合うのも今日限りだ、覚悟しろ鬼蛙！」

「いきなり暑苦しいなあ。ボク喧嘩は嫌いなんだけど平和的にいこうよ平和的に」

「ほざけ、どの口が……!」

サクラヒメと相対するのは身の丈四メートルもあるカエルの化け物。オニグミ幹部、八大鬼の一体鬼蛙である。体表はぬらぬらと光り、いたるところにぶつぶつとした出来物をこしらえている。

額の部分からマッシュルームヘアの少年が顔を覗かせ、声はそこから聞こえていた。

「父さまと母さまの仇……今日こそ討たせてもらう」

「おお、すごい靈力。若いっていいよね、レベルアップが早くてさ。ボクなんて歳とっているから物覚えが悪くて」

「覚悟ッ!」

風明刃を中段に構え、疾風のごとき速さで間合いを詰めるサクラヒメ。

凌駕する。鋭い突きが無防備な腹部目がけてくりだされた。

「殺った！」

「それはどうかな？」

しかし、あと一歩というところで大太刀が止まる。反撃を受けたわけではない。原因はサクラヒメ自身にあった。

「これは……ッ！」

「いつまでも対策を講じないおバカさんとも思っていたかな？　すでにキミの情報は把握しているんだよ。装刃戦姫サクラヒメ、いや建宮流華」

（コイツわたしの名を……!?!）

でつぶりとした太鼓腹がスクリーンめいて光り、映るのは眼鏡をかけた少年の映像。家族で夕食をとる三城良平の姿であった。

「なぜ良平の姿が……き、貴様何をッ！」

「おっと、その物騒な刀はしまった方がいいと思うよ。彼の肩を見てごらん」

良平の肩にはホヤのような物体がへばりつき、ドクンドクンと鼓動を打っていた。明らかな異物だが霊力のない人間には見ることも触ることもできない。不思議と肩が重く感じるくらいだ。

「知っていると思うけどコイツは爆震蟲。ボクの身に何かあったら作動するようになってるんだ。例えば刃物で怪我をすれば」

「わたしを脅迫するつもりかこの卑怯者！」

「キミの選択肢は二つ。一つ、ボクを殺して両親の仇を討つ。一つ、恋人を救うためにボクのいいなり、雌奴隷になる」

「雌奴隷だと?!　ふざけたことを……」

「クフフ、好きな方を選んでいいよ。前からその身体を好きでだけイジくりまわして、エッチに遊んでみたかったんだ」

「クッ……うう……」

「一分あげるから手早く決めてね。キミと違ってヒマじゃないから」

不気味な笑みを浮かべる鬼蛙をにらむ黒髪戦姫。雌奴隷という単語から凄まじい怖気を感じる。

（ここで斬れば奴の命を断てる……だが……しかし……良平は……良平の命は……）

極限の二択に苦悩する。一分の間に数多の逡巡が流れ、ようやくサクラヒメは答えを出した。

「貴様の雌奴隷になる……だ、だから良平には手を出さないでくれ……頼むこのとおりだ……」

風明刃が音を立てて地面に倒れる。武器を手放した黒髪戦士は仇敵にむかって頭を下げた。

「クク、クハハハハ！　歓迎するよサクラヒメ。ボク好みの雌奴隷に調教してあげる」

（今は言いなりになってやる。だが覚悟しておけ鬼蛙……わたしは必ず貴様を討ち滅ぼしてみせる!）

恭順の裏で牙を研ぐ黒髪戦姫。夜闇がまた深さを増していく。

「じゃあ、オッパイを触らせてもらおうかな。当然、鎧は外しておいてね」

「そ、それは……ッ！」

「あれ、雌奴隷になるって言ったよね？　まさかこの程度のことまでできないの？」

「わかっている！　今脱いでやるから待っている！」  
サクラヒメは胸の布生地を大きく開くと、たわわに実った乳房をさらけ出した。柔らかな豊乳が狭苦しい鎧から解放され、プルプルと弾む。汗で濡れた乳頭は桜色に火照っていた。

（こんな下衆に肌を見せるなんて……）

学生にしては大きすぎるオッパイは周囲から好奇の目で見られることが多く、彼女の一番のコンプレックスだ。いやらしい視線を感じることも多々あり、そのたび不埒な輩は鉄拳で制裁してきた。  
二つのふくらみを鬼蛙は下卑た視線でなめまわす。

「すつごくデカオッパイだね。まるでメロンみたいだ」

「……それがどうした」

「こんな下品乳だと。クラスでも視姦されてるんじゃない？　学園でのキミってオナベットのなのかな？」

「そ、そんなわけあるか！　愚弄するのもないがいにしろ！」

「んー、まだ自分の立場がわかっていないようだね。恋人はどうなつてもいいんだっけ？」

「うっ、ぐ……」

凍りつくような視線と追及に口ごもつてしまふ。鬼蛙の望む答えを言わなければならないことは明白であった。

「ふんっ。まあ、そうかもな……」

屈辱に耐えどうにか言葉をしばりだす。良平が人質でなければ、もうこの瞬間にも斬りかかりたいくらいだ。

（くうっ……このヌルついた目で見られるとぞつとする。やはりコイツも他の男共と同じか……）

自らを欲望のはけ口としてしか見ていない男性はサクラヒメにとつて軽蔑すべき対象だ。良平以外の異性は今でも受けつけない。

「うんうん。奴隷はご主人さまに従わないとね。今から質問をするけど全部正直に答えてもらおうよ。嘘ついたら……わかっているよね？」

「ああ。好きに聞けばいい」

乳頭を露出させたまま恥辱に耐える美少女戦姫。逃れることのできない羞恥質問が始まった。

「一つ目。サクラヒメって処女なの？」

「ッ?!　だれがそんなことを言うかッ！　ふざけるのもいい加減にしろッ！」

「はあーあ、今のは傷ついたな。傷つきすぎて自殺してしまえようだよ」

「わ、わ、わかった！　言う！　言うからやめろ！」





はあ：  
いい気持ち

勝手に使わせて  
もらったけど：  
神父様はどこに  
行ったのかしら

教会から  
連絡いってる  
ハズなんだけど

身を清め  
次なる戦いへ



でもなんだか  
様子が：

街の住人？

のんびりシャワー  
浴びてる場合じゃ  
なさそうね

教会の周りに  
人の気配：

# 粘獄のリーゼ

淫罪の宿命 第2話 マーテルの街

キユ

漫画  
COMIC

くすのき  
楠木りん

りんどう  
電胆 原作

# ガリヤン

まやっ!?



おおお女ア!  
若い…女…!

うおお…  
いっいたぞ…!

な…っ!?  
なによこいつら!!

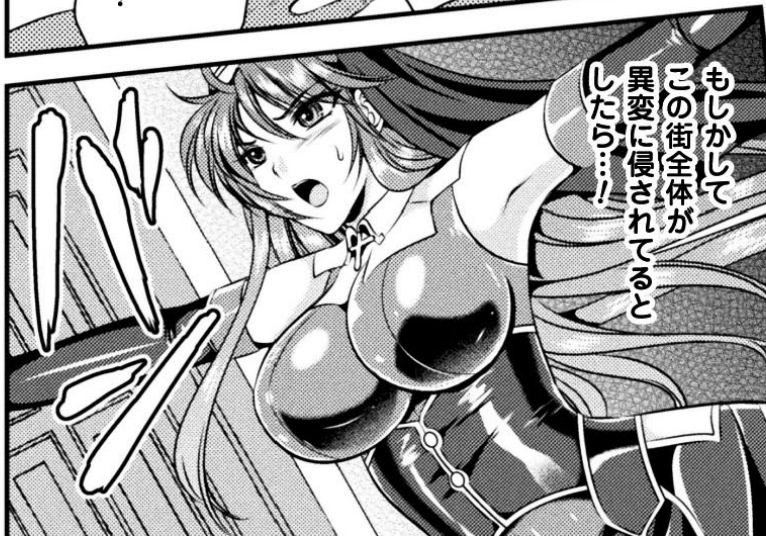


く…

ガチャ

ふへへ…  
待てえ…

おおお…  
ふへへ…  
犯してえ!



もしかして  
この街全体が  
異変に侵されてると  
したら…!



正気を  
失ってるけど  
人間だわ

魔的汚染の  
影響?





フオッ  
フオッフオ!

そろそろ  
『教会』が来る  
ところだと  
思ったわ



人間相手だと  
やはり手出し  
できぬようだな  
神の犬よ

いや...



悪魔なら  
斬り倒せば  
いいけど...

もう...!  
どうしたら  
いいのよ!



なによこれ  
住人すべてが  
狂っちゃって  
るんじゃない

ヘルデ  
ブランド家の末裔…  
イバラの姉妹  
リーゼよ

こいつ…

わたしのことを  
知ってる？

どこまで…  
どうして!?

…はっ！  
姿も見せず  
大物ぶっちゃって

どうせ本当は  
大したことない  
小物なんですよ

フオフオフオ  
フオフオ！

そのぐらい  
威勢のあったほうが  
ワシの研究素材としても  
役に立とうて…

りびりあ

こやつらのような  
屑と違つてのオ

おおおお…  
べゼリオン様…

なんなりと  
ご命令を…

ふん…そう

この街の人たちは  
あんたが操ってるって  
わけね

ハカリ

…悔しいけど  
ここは退くしか  
ないようね  
一般人相手に  
戦うわけに  
いかないもの

フオフオ…  
逃げる気かな？

こいつらの命  
ワシの手の中と  
いうのを  
忘れたのかえ？

…っ！

…最悪たわ！

逃げることも  
抵抗することも  
できないなんて…!!

お



…だがまあ  
ただ絶望を  
与えるだけでは  
面白くない

術を解いて  
やっても  
よいぞ？

ふん  
随分と軽い  
条件ね

下衆には  
下衆なりの  
酔狂がある  
ものよ

お主のような  
気丈な聖女を  
貶めるには  
これが一番の  
筋立てじゃや

もし…理性が飛び  
獣欲に溺れた  
この者たち全員を  
満足させられたら

よいか？  
期限は陽が  
昇るまでじゃぞ

せいせい  
足掻いてみせよ！  
イバラの姉妹よ！

うおおオオ！  
女あ…ぐひひ！

いいわよ  
やってやるう  
じゃない！

ひひひッ！  
犯してやる！  
全部汚して  
やるぜえ…！

朝まで  
耐えれば  
いいんでしょ

夫を殺した中年男と  
若未亡人を広がる淫紋と  
極快感が襲う

いそがいたけつら  
小説 NOVEL 磯貝武連  
ふぐるもり  
挿絵 ILLUSTRATION 梶森

淫紋に墮ちる  
未亡人騎士



軍靴の音を響かせてセレナ・ファルジアは王城の廊下を足早に進んでゆく。その足音に怒気を含んでいるのは聞き者の気のせいではない。手に持つ書類に細い指先をめり込ませ本来ならば可憐でさえある表情をキツくして。セレナは夫であるアベルが死んだ時からこの表情以外浮かべた記憶がない。

歴史ある大国リグニルの騎士の家系に生まれたセレナは、大臣職を歴任する家系の一人息子であるアベルと幼くして許嫁の約束を交わしていた。

親同士もそして本人同士も、望んで交わされた二人の結婚の約束はアベルが若くして内政大臣となり、セレナが騎士団長になった時に果たされた。

しかし大勢の人々に祝福された二人の結婚は僅かな蜜月を過ごしただけで終わりを告げてしまう。夫であるアベルの突然の事故死。若くして未亡人となったセレナはまるで自分自身が死んでしまったような気持ちを味わった。

幼い頃から一緒にいたアベルがもうどこにもいない。その絶望感と喪失感にはセレナから生きる気力さえ奪っていった。しかし事故の報告書を騎士である特権を使い読んだ時にセレナの心に火がついた。これは事故死ではなく殺人ではないのか。その疑念がセレナの心をもう一度奮い立たせた。

もしアベルが事故ではなく殺されたのだとしたら、それを暴き、殺した者に裁きを下せるのは自分しかない。決意したセレナはその日から独自の

捜査を進めた。騎士である特権を利用して、それを失わない為に任務をこなしながら、一人地道に寝る間も惜しんで毎日この事件だけを調べ続けた。

その間、何度も再婚話はあつたし言い寄る男もいた。若く麗しい未亡人、その熟れた肉体に引き寄せられる者は多い。それに夫を亡くしてからのセレナの常に憂いを帯びた表情は庇護欲と嗜虐心の両方を男に与える。

だがその望みを叶えられる者は一人もいなかった。アベルの無念を晴らすの男など目に入るはずがなかった。そうして三年が経ち、今日セレナは握った証拠を持って遂にその犯人と目される者の部屋へと復讐を果たす為に向かっていた。犯罪者である者の部屋に供も連れずに向かうのは、自分一人

で夫の無念を晴らすべく逮捕する為としていざという時にそいつを斬り捨てるのを邪魔されない為である。(アベル……待っていてください。もうすぐあなたの無念を……わたしが) 心で亡き夫にそう誓い、セレナはある一室の前で足を止めた。そこはリグニルでの大臣職を務める者へと与えられる執務室だった。

呼吸を整え、腰の剣を確認、それから扉をノックする。すぐに返事があり、セレナは「失礼します」と声をかけて扉を開け中に入った。そこには、大きな執務机に向かう男がいた。

脂ぎった顔に太めの身体を魔導服に

押し込んだ四十半ばの男。リグニルの魔導大臣であるゲイル・ブローベルだ。ゲイルはセレナの姿を見ると席から立ち上がり彼女の前へとやって来た。「セレナ様。如何なさいました？」

やけにへりくだつたような物言いをする。これがゲイルという男だった。自分より身分が低い者にも常に下手に出る。その者がやがて自分より上の立場にならないとは限らないからだ。そうした処世術を嫌う者は多いが表だつて文句を言う者はいなかった。

セレナはそんなゲイルに今は吐き気を覚えながら早速用件を切り出した。「実はゲイル殿に火急の用事がありこうして参つたのです」

「私に？ はて、一体何でしょう？」自分がやって来て用事と告げても素知らぬ顔を続けるゲイルにセレナの怒りが燃え上がる。今すぐにでも斬りかかりたい気持ちを抑え、胸の怒りを言葉に変えてセレナは問い詰め始めた。「わたしの夫アベルが死亡した事故について、あなたが関与しているという証拠を得ました」

いきなりの核心を突く言葉にゲイルは口をポカンと開けた。「あなたはある犯罪組織に依頼し、夫を事故死に見せかけて殺しましたね」

「突然何を？ 何の事ですか？」  
「憶けないでください！ わたしは証言を得たうえでこの話をしていきます!!」  
「証言だなどと、どうぞどこぞの無頼

の輩が言う戯言でしよう。第一私にはアベル様を殺させる動機が」

「動機なら充分過ぎるのがあるではないですか！ あなたは国民に配給されるべき魔法物資の数々をその犯罪組織に横流ししていた！ そしてそれに気づいたあの人を……」

正義感の強いアベルはそれに気づいてやめさせようとした。きつと自首を勧めたのだらう。それをゲイルは自ら手も下さずに口封じに殺したのだ。怒りに震えるセレナにゲイルは、

「落ち着いてくださいセレナ様。貴女が何を仰っているのか私にはさっぱり……それにも似そうだとして証拠はあるのですか？」

「あなたが横流しをしたという証拠なら総てがここに……それに夫を殺せと指示したという証言記録も。これ以上どう言い逃れするつもりですか」

証拠を纏めた書類袋を見せるセレナは静かにしかし重い口調でそう言いきつた。中身を見せると言つてくると思っていたセレナだが、ゲイルは俯いて沈黙してから突然顔をあげた。何かを仕掛けてくるかと覚悟して剣の柄を握るセレナにゲイルはそのまま床に膝をつくと土下座を始めた。「な、何の真似ですッ!!」



「いいえ、ですがこれだけは信じてください。私は決してアベル様を殺せだなどそんな指示はしていません。ただアベル様が握った証拠を奪えと命じたらその者が先走って」

「ここに来てその言い逃れ。本当にどこまで下劣なのですか、反吐が出る」

吐き捨てるような言い方にもゲイルは何も反論せず頭を下げ続けた。だがやがてゲイルは卑屈な顔をあげて、

「私は許されない事をしました。それは反論のしようがない。ですがどうかどうかこの一件は何卒穏便に」

こいつは何を言ったのだ？ 信じられないという思いがセレナから一瞬力を抜いてしまう。だがすぐに怒りに震え、

「あの人を殺しておいて穏便に……あなたは何が何を言ってるか理解しているの!？」

「ですからそれは私の意思ではなく！寧ろ私も奴らに利用されたのです!!」

その後悪いのは自分ではないと滔々と言いつつ何を言っても無駄だと悟ったセレナは剣の柄から手を離すと、

「もういい、分かりました……あなたには何を言っても無駄です。こうなつた以上は証拠を総て評議会へと提出します。大人しく沙汰を待ちなさい」

「お、お待ちを！ それはどうか」

「この手で裁きをとると思いましたが、あなたにはその価値もない。精々裁きを受けるまで己の罪を悔いなさい」

怒りではなく侮蔑の声をかけてセレナはその場を立ち去ろうとした。ゲイルが何を言っても振り返る気はない。だからゲイルが次にとつた行動への対処が遅れてしまった。

「ここまで言っただけではないとは。夫婦揃って頭の固い方達だ」

へつらうような声音が消えて突然ぶてぶてしくなったゲイルの声にセレナは眉を蹙めて振り返る。そして床に膝をついたままゲイルが手に魔法杖を持つている事に気づいた。

「何を」と言おうとした瞬間その身体には強い電流が流れてセレナは失神してしまふ。腐っても魔導師だから対魔法防御用の備えはしていたセレナだがゲイルが自分の部屋に對魔法防御を無効化する処置を施していた事には気づかなかつた。

氣を失つたセレナに立ち上がったゲイルはゆつくりと近づくと、

「さて、どうしましよつかねえ。始末するとまた面倒な事に……それに、この身体は始末するには惜しい気も」

そう言うゲイルの顔には粗野で下卑た笑みが浮かんでいた。

SSSS

目が覚めた時セレナは自分がどこにいるのか分からなかつた。窓のない薄暗い部屋で、魔力ランプの明かりだけがぼんやりと灯っている。

見覚えのない部屋に段々と記憶が思い起こされてゆく。ゲイルを問い詰めに執務室に向かい、そこで何か魔法を

かけられて氣を失ってしまった事。

ゲイルの事を調べれば調べるにつけてその矮小で卑屈な人間性が知れ、心のどこかで侮っていた自分をセレナは恥じた。腐っても魔導師大臣まで勤める男だ。それなりの技量は持つていて然るべきと考えなければいけなかつた。

自分の失態に顔を歪めるセレナは、

あの男が自分をどこに連れて来てどうするつもりなのかを考え、我が身の確認をする。そして驚きに息を詰まらせた。手足の拘束などはされていないかつたが、その軍服の胸元はブラウスまで開いて胸の谷間が露わになっている。

思わず暴行を受けたのかとスカートの中へそつと手をやるが、そこには特に何かをされた痕跡はない。

ホツとしながらも、ならば何故このような場所に来て来られて、しかも生きているのだらうと疑問に思う。

拷問などで氣持ちを変えさせる面影を考へるなら夫のように殺した方が手取り早い。そんな事を思い胸前を合わせようとしてブラウスの中を見た時、

セレナは思わず「え？」と呟いた。見慣れたはずの自分の素肌、そこに見た事のない痣が浮かんでいたのだ。

これは何だとセレナは胸前を開き自分のブラに包まれた乳房と、そして腹部を確かめる。するとそこにも何か紋様じみた痣が浮かび上がっていて、それはセレナの全身を包み込んでいた。

「なんなの、ですか？ これは……」

呟くセレナのもとへ扉を開けてゲイル

ルが恰幅の良い身体を揺らしやつてきた。自分の身に何が起こっているのか分らないセレナはそれでも必死に氣を張ってゲイルを睨んだ。

「あ、あなたは！ わたしに一体何を」

その言葉にゲイルは「おや」と呟き、「もう気づかれましたか。流石騎士团长様だ。身体の変化には敏感なようで」

ふざけた物言いにセレナの怒りは増し、同時に何かを知っているような口ぶりには焦りも増してしまふ。

「ちゃんと説明をして!! 何をしたのですか！ わたしに一体何を!？」

魔導師に何かを身体に刻み込まれた。それがどれだけ恐ろしい事か騎士团长を務めるセレナは理解していた。

人格破壊、精神崩壊、記憶除去。心に関する魔法を簡単に思い出すだけでそれだけある。ここに肉体への痛苦を与える物を加えるならパリエーションは恐ろしい数だ。そのいずれかを施され、今回の件をなかつた事にしろと言われるのかと思うと焦りと悔しさに心が張り裂けそうになる。絶対にそんな事には屈したくないと思うが、心が壊れてしまふほどの魔法には耐えられない事をセレナは知っていた。ただ殺すのではなく、そんな方法で屈服させようとするゲイルに心底嫌悪感を抱くセレナだが、事実はその何倍も卑劣で非道で彼女を苦しめるものだった。

「今回の件で私は学んだのです。面倒が起きてそれを処理しても人死にが出るとまた次の面倒が起きるだけだ」と

ヤレヤレと首を振るゲイルにセレナは夫の死を面倒の一言で片づけようとする事に悔しさで涙が滲んでくる。睨みつける視線を受けたゲイルは、何が楽しいのか笑みを浮かべると、「そこで、私は考えたのです。それから面倒事を起こそうとする本人に諦めていただくのが一番だとね」  
やはりとセレナは目に涙を浮かべて拳を握り締め、言葉を絞り出した。「それで苦痛を与える魔法を……」  
「苦痛？ そんなまさか。私はセレナ様のようなお美しい女性が苦痛にのたうつ様を見て喜ぶような趣味は残念ながら持っていないません」  
「え？」と呟くセレナにゲイルは自分が行った邪悪な魔法の説明をした。「セレナ様は私が何の魔法を得意としているかご存知ですか？ まあ、あれだけ念入りにお調べになつて居る事ですから、当然ご存知でしょうな」  
一見関係ない話を始めるゲイルにセレナは素直に思い出す。ゲイルの得意とする魔法、それは合成魔法だ。

一度戦争などで行われるようになった時の為に他ならない。セレナがその事を思い出しているに察したゲイルは、「そうです。私の得意とするのは合成魔法。異なる物同士を魔素レベルで融合させる技です……そしてその技を私は貴女に使つたのですよ」  
「わたし、に……どうせい……な、何を!! 何をわたしに!!」  
焦つて詰め寄るセレナの揺れる胸元が痣を見せる。それを下卑た笑みを浮かべて見つめゲイルは言った。「淫魔ですよ。それも下級のね。召喚魔法はあまり得意ではないので精々が下級のしか呼び出せなかつたのです」  
申し訳ないとい心にもない事を言うゲイルの言葉はもうセレナに届いてはいなかつた。淫魔。それも下級の。それは意識もなかつた闇夜を彷徨い、冒険者や旅人のもとに淫らな姿で現れて精気を奪つてゆく底辺の化け物。戦地などにも現れる為に、騎士団などではその対策に苦心する事もある。そんな存在だ。

淫魔も上級になれば高度な魔法や幻術などを使いこなすが下級はそんな優れたものではない。ただ淫靡にヒト種や垂人種から精気を奪うだけの存在である。そんなものと合成させられたと聞かされセレナは放心したように、「……嘘よ……そんなの、うそ」  
「いいえ、本当ですとも。その全身に浮かんだ淫魔を示す淫紋が何よりの証拠。貴女の身体には魂の奥深くまで淫魔が混ざり合つているのですよ」  
「もういい! やめて!! わたしが淫魔となつて……これ以上愚弄するならその口きけないようにしてやる!!」  
認めたくない気持ちに語気を荒らげさせるが、ゲイルの笑みは一層深くなる。それが今聞かされた事を事実だと認めさせるようでセレナは首を振つて現状否定しようと思死になる。  
拷問される事も死ぬ事も、これに比べれば何という事はない。淫魔になった。騎士でありそしてアベルの妻である自分が淫魔に。それがどういう事か想像した時にセレナの身体の奥から渴望にも似た疼きが起こってくる。未亡人であるが故にそれが何への飢えか知つているセレナは「いや」と呟いた。「おや、どうやら来たようです。精気への飢えが。淫魔と合成させてからもう数時間ですから、そろそろとは思つていました」  
「精、気……っ! 飢え……そんな……ちが……んん!!」  
否定しようとする言葉とは裏腹に、セレナの全身を襲う雄の精気を求める疼きはどんどん強くなる。

夫が生きていた時、セレナはこれによく似た疼きを感じた事が少なからずあった。アベルに抱き締められた時、キスをされた時、愛の言葉を囁かれた時。そんな時に肉体がどうしようもなくアベルを欲してしまう感覚にそれはよく似ていた。しかし決定的に違うのは今のこれは特定の相手ではなく雄と  
「私は女性が苦痛に泣く姿より快楽に何もかも忘れよがり狂う姿が好きなのです。アベル様には見せていたお姿でしよう? 私にも見せてくださいよ」  
自分の奥底に感じる総てを拒絶しようと思死になるセレナのもとにゲイルがやってくる。その体臭と威圧感にセレナの全身の痣が盛大に疼いた。  
「な、んで……なんで……ううう」  
ただ傍にいる。それだけなのにこんなにも身体中が疼いてセレナの部分をジンジンと熱くさせる。  
欲しい。この人の精が欲しい。肉棒から出る熱くてドロドロの雄液を子宮の中に何回でも流し込んで欲しい。  
夫を殺した犯人だという認識も憎しみも消えたわけではないのに、それ以上今現在自分に精気を与えられる唯一の雄を求めてセレナの中に融合した淫魔が囁いた。  
拒絶できない、このままだと間違いなく抱かれてしまう、だつて身体がそれを求めてしまつて居るから。  
(アベル: 助けて……: お願い)  
泣きながら心で助けを求めるが、死んだ者には何もできるはずがない。けれど亡夫を思い出す事で最後の理性を振り絞られたセレナは近くにあつた燭台



てを倒すと、その蠟燭立の針部分を自分の咽喉に突き立てた。少し力を入れるだけでこんな男に抱かれずに清い身体のままアベルのもとへ行ける。そう考えて力を込めるセレナにゲイルが言う。

「いいのですか？ もし今死んでしまつと、淫魔と融合したセレナ様の魂は精気を求め彷徨い歩くようになりませよ？ セレナ様のお姿でね」

「……………え？」

「当然でしょう。セレナ様は既に半分は淫魔だ。肉体の枷から解き放たれれば残るのは精神体のみ。セレナ様の理性の宿る肉体から自由になった淫魔の部分はその姿で誰かれ構わず……」

燭台を落としたセレナは放心した瞳で涙を零した。それだけはダメだ、絶対にダメだ。自分の名譽などどうでもいい。けれどそんな事になれば夫が、アベルの名が穢れてしまう。

淫魔の妻を持った男。それがどういう噂を広めていくのかセレナにも容易に想像がついた。あの優しいアベルの名譽を自分が穢す。穢し続ける。それだけは絶対に許容できない。

そしてこの場から逃げる事もできないだろう。逃げればどこかで理性のタガが外れ知らぬ間に男を求めてしまつてもおもしろくない。それでは死んでしまつてから起こる事と変わらない。（死ぬ事も逃げる事も……叶わないというの？）

心での岐きに絶望するセレナに残さ

れた唯一の方法は、ただ飢えて死ぬ事も、他の男を求めて彷徨う事もないように、ただ一人の事情を知っている男に抱かれ続ける。それだけだった。そしてその男とは、セレナをこの状況に追い込んだ憎むべき相手、夫を殺した仇敵、目の前にいるこのゲイルである。

「分かつていただけただようですね」

にこやかに微笑むゲイルはそう言つて着ていた服を脱ぎ始めた。呆然とするセレナだが、ゲイルのたるんだ体毛の濃い身体を見るとそれだけで陰部が濡れ始めてしまう。すぐにでも雄器官を咥え込めるように進化した淫魔の肉体にセレナは涙を流したまま何の抵抗もできずゲイルに押し倒された。

死んだ夫の倍はある重いゲイルの身体が押し掛かってくる事にセレナは身体が痺れるのを感じる。

これから精気を貰えるのだと理解した身体が期待にザワついているのだ。そう感じると死にたい気持ちが大きくなった。けれどそれが許されない今、セレナにできるのは自分を保つ為の言葉を中心に唱える事だけだった。

抱かれて精を吐き出されたとしても、

それはこの男が独りで勝手にやった事。自分が何の反応も示さなければいいだけ。この身は穢れてゆくだろうが、それでも心だけはアベルを想い続けていく。そもそもこんな抱かれる内にだつて入らないはずだ。卑劣な男が卑劣な罠を仕掛けて魔法で身体を変えてしまった。そうして抱かれたとしても

そんなのはセックスじゃない。

心で必死に考え続けるセレナだったが、ゲイルの太い指が軍服越しに胸を揉んだ時「きゃあう！」と高い声をあげてしまった。それは悲鳴というよりも嬌声に近くセレナは一瞬自分が出したものだとは信じられなかった。

胸を、それも服越しに触られただけなのにこんな声が出るほど快楽が走つたなんてまだ信じられない。それでもゲイルの指が胸を揉み込んでゆくと、「あ、んん！ んふあ！ あ、あああ!! きや、う……きゃあうう!!」

咽喉の奥から漏れ出てくる声を止められずセレナは首を左右に振つた。感じたくないのに指がイヤらしく胸を握ねるとどうしても乳房から快楽が押し寄せて声をあげさせる。

感度が鈍いわけではないが、それでも服の上から触られたくらいで声をあげるほどセレナはウブではない。未亡人なのだ人並みに経験はある。だがこの刺激はその経験の総てを覆すほどセレナの中に快楽を齎した。

（これが……淫魔と融合したということ？ ……そんな）

受け入れがたい状況にセレナは快楽を堪える為を嘔み、敗北感と嫌悪感に涙を浮かべ、ゲイルを睨みつける。だがゲイルはその視線を平然と受け止め、逆に嬉しそうな笑みさえ浮かべ、「セレナ様は感度がいいですねえ。服の上からでもこんなに……これは直接触るのが楽しみだ」

そうなるように仕組んだくせに、卑怯者。そう心で罵声を浴びせるが、それを言葉にする余裕がない。そうしてるとゲイルの手が軍服のボタンにかかり上着を脱がせようとしてくる。思わず「だめ！」とゲイルの手を止めようとするが、その油断が隙を作りセレナはキスをされてしまった。

今までアベルにしか許さなかった唇。そこに嫌悪する男の分厚い唇が重なり舌を挿し込もうとしてくる。キスだけは絶対に許す気はなかったセレナは絶望に動きを止めてしまう。そうするとゲイルは服を慣れた手つきで開けさせてセレナの乳房を弾けさせた。

騎士として鍛錬は欠かさないので二十代後半でも若く張りのある乳房は窮屈なブラから解放されブルンと揺れ出てきた。その乳房には淫魔との融合を示す模様が濃く浮かび上がっている。ゲイルの指が今度は直にそこを責めようとするとセレナは唇と乳房のどちらを守ればいいのか分からなくなり、結果として両方に刺激を受けてしまう。

ごつごつした指は絶妙の力加減で弾力のある乳房肉を揉み込んで、そこから流れる快楽にセレナを喘がせる。すると今度はその甘く開いた唇の中に舌が挿し込まれてくる。悍まじさに鳥肌が立て、舌を噛んでやろうかと思えたのは僅かな間だけだった。ゲイルの舌が喉内を颯り唾液を送り込むと、セレナの中が熱くなつていったのだ。まるで特上の美酒のように感じるゲ

シェリー  
ジョブ:盗賊

ひあああ  
熱いっ♡

ふあああああ♡  
疼くっ 穴が  
疼くっ♡

オナー  
止まらない  
よおオオ♡

淫紋で  
お腫の奥っ  
子宮が疼く  
のお♡

これっこれ這いっ  
私発情しちゃってる  
乳首とフリガ  
勃起してるっ♡

# チート紋様術で 淫モラル ハーレム性活

かずひろ

漫画 一弘 本誌初登場!

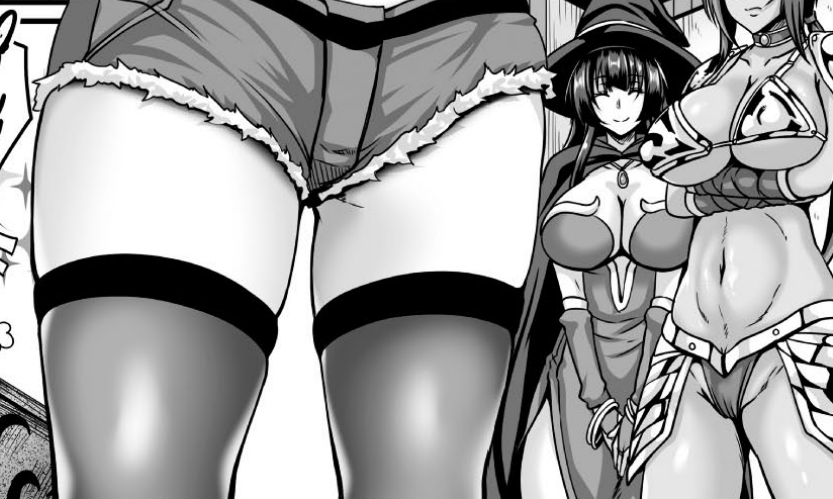
お願いっ  
早くちゃん頂戴  
待ちきれないのっ

早くハメて  
ちゃん入れないと  
気が狂っちゃうっ♡

ははっ  
この本は  
本当に凄いな  
あのシェリーが  
もうすっかり  
淫紋の虜だ

あの糞むかつく  
ポロ本屋には  
感謝しないとな







ここに住まわせてもらってるだけでもありがたく思ってる雑用くらいちゃんとしなさいよね

この村でジヨブ無しなんてあんただけなのよ

たぬん

疲れましたから先に帰りますわよ

なーもうそんなのほっとこうぜー



まだまだ分からないだろ

ジヨブ無しで魔力の無いあんたが魔法使えるようになるわけないじゃん



いでっ

はあ？何よその態度むかつくわね



本が…血の紋様術？

額が切れて血が…

自分の立場分かっているの



ダメでもともといちかばちかやってやる女にしか効かないなら俺の手に描いて写せば

あっちょ

あんたは明日までに全部の準備済ませとくのよいいわね

よく分からないが



対象が女限定の発情と服従の淫紋だと？

あ分かった！私ももう帰るよー

魔力が…いやこれは対象の魔力を使うのか





な何っ…  
身体が…急に  
熱く…



ま待ってくれ  
シエリー



な…にこれ…  
どんどん…  
苦しく…

お俺の家が  
すぐそこだから  
休んでいけよ



ちよっ…  
だ大丈夫か

さ触らな…  
ひん!

なんだ  
本当に  
効いたのか!?



…そそうね  
わ分かった  
…わ

でも  
ふらふらじゃないか  
自分の家まで  
帰れるのか

ああなたの…  
家…なんか  
いくわけ…うっ





セイント・エクティス  
神の御使い  
**希美**  
淫紋の惑い

暮ら少年の前で潮吹き絶頂！  
淫紋に肉体を支配され恥辱の誘惑に屈する！！



えぐち  
小説 NOVEL 江口ヒロヨシ  
かいり  
挿絵 ILLUSTRATION 魁李

この世界には人に仇なす怪物がいる。彼らは未だ穢れを知らない純真無垢な子どもたちの魂を求め、さまよう。

悪魔。黙示録に記されている、血のように赤い眼で人心を惑わし、外道を薦め、異形の姿で血肉を食う存在。

——それが今、身を竦め、必死に命乞いをしていた。

コウモリの頭と翼、人間の胴体と足をもった悪魔の真っ赤な双眸に映るのは、まるで燐光をまとうかのように夜の闇の中でも決して輝きを失わないプラチナブロードの髪をもった女。

その白いグロープに包まれた手には、かつて悪魔の王の心臓を串刺しにし、永劫の闇へ封じたと言われる十字架を模した槍。

「ひ、ひい……た、助けてくれ！ い、命、だけは……あつ！」

「なら言いなさい。仲間はどこですか」

「ひつ、く、来るなつ！」

ロングブーツに包まれた足で女が近づくと、悪魔は頭を抱えた。

二重の脛に縁取られた切れ長の青い瞳、美しい流線形の中にかすかに憂いをたたえた眉、高い鼻梁に桜色の唇。なめらかな肌は透き通るように白い。

八頭身の伸びやかなスタイルを包むのは純白のボディスーツ。それもその

コスチュームはセパレートタイプで、美しくびれや縦長のヘソが丸見えになっっているが、下品さはない。それどころかまるで宗教画の中から立ち現れた神の御使いのごとく清らかにして、

凜然とした雰囲気をもたらす。

「あなただけで私に勝とうとは思わないでしよう。さあ、言いなさい」

決して声を荒らげていないのに、そのソプラノの響きには有無を言わせぬものがあつた。

「い、言ったら殺されるっ！」

「地獄の門をくぐるのではなく、天上に召されたいのなら……善行をなさない。最期のチャンスですよ」

「勘弁してくれえ。ガキの魂をくれるっていうんで、つ、つい……。もう、金輪際あんたには近づかねえからっ！ 頼むよおっ！」

悪魔は赤い眼に涙をいっぱいに滲え、ひたすらに懇願した。

だからこそ、気がつくことができなかったのだ。

ガキ。その言葉に女のさざ波ひとつ立たない鏡面のように澄みきつた双眸が激情に揺らいだことに。

「消えなさい」

女性性は槍を逆手に構えるや、悪魔の身体めがけ槍を突き下ろす。

「ゲヘエエエエエエ……!!」

醜悪な断末魔と共に、悪魔の身体はたちまち灰へと変わり、朽ちていった。

そして、女の身体は光に包まれた。

光が収束したあと、なんでもない路地裏のどん詰まりに佇んでいるのは、あの扇情的なまでに肌を見せた御使いではなく、神に奉仕する修道女。

しかし地味なその衣服をまとい

ても、女性の日本人離れた彫りの深い美しさは決して隠せない。

「ふう……」

レベッカ・オーナ・希美はプラチナブロードの髪を払い、そばにおいておいた紙袋を拾い上げた。

そこにはたぐさんの食材が詰まっている。今日は彼女が務める教会の運営する孤児院の子どもの一人、広瀬高志の誕生日だった。彼は幼くして両親を悪魔に殺されていた。

身内を亡くした子どもはたくさんいたが、彼に対する希美の想いは人一倍だった。孤児院である以上、特定の子どもへの肩入れをしてはいけないと自覚しながら、病弱で寝込むことの多かった高志には、幼い頃の自分を重ねずにはいられなかった。

高志は希美にとつては弟も同然であり、高志もまた希美を実の姉のように慕ってくれていた。なぜなら希美の両親もまた悪魔に殺されたからだ。

（もう私や高志くんみたいな思いは、誰にもさせない）

御使い（セイントエクティス）と

して、神に選ばれし者にのみ許された、異形の者たちと対抗する力を行使すること。すなわち彼女にとつて悪魔たちとの戦いは日常の延長線だ。

希美の勤める聖エイト教会は地域の篤志家からの寄付でなりたつ、身寄りのない子どもたちの養育施設。そこは希美にとつての仕事場であると同時に帰る場所でもあつた。

両親を失った希美はここで育ち、自分と同じ境遇の子どもたちを守りたいという気持ちで修道女になることを決意した。

（！）

教会を前にした希美は違和感に気づいた。出かける頃には煌々と灯りがともっていたはずなのに、今はどこにもそれらしいものはなかった。

教会に併設された居住区はもちろん、いつもかかさず祈りを捧げる教会にも胸騒ぎを覚え、買い物袋を放り捨てて駆け出す。

「シスターっ！ みんなーっ!!」

教会の扉を開けた刹那、言葉を失う。祈りを捧げる神聖な場はめちゃくちゃにされていた。壁や床には獣の爪で引つ掻いたような痕跡が刻まれ、説教台や長椅子などはほうぼうに転がされ、何より教会のシンボルともいえるべき十字架は無残なまでに破壊し尽くされていた。そしてその場にあるのは残骸ばかりではない。共に子どもと神に奉仕を捧げることを己の使命とする同僚のシスターたちが首や腹を挟られ、倒れていた。

「っ……」

希美は床を蹴るように走り、居住区に駆け込んだ。そこも教会同様無残な有り様だった。と、そこに紙が貼り付けられ、血文字で文章が書かれていた。

——ガキどもは預かった。返して欲しいければ、以下の場所に来い！

その瞬間、希美は気づいた。

その瞬間、希美は気づいた。



あの悪魔が単なる囃だったと。紙を手の中で破り捨てた。(悪魔……決して許さないわ)

指定の場所は過疎化に伴い廢校になった学校の体育館だった。(みんな。どうか無事でいてっ！)

雲のない空に浮かぶ満月は、悪魔の双眸のごとく赤黒い。

体育館の扉に手をかけると、ゆっくと、同時に不気味な哄笑が響き渡り、目の前が煌々とした。

「高志くんっ!!」

目の前にいるヤギの頭に人間の胴体と腕、ヤギの足をもつ悪魔に踏みつけられている少年の姿に目を見張った。

そしてそのそばにある赤錆の浮いた檻の中には他の子どもたちが閉じ込められていた。

「お、お姉ちゃん……助けてえっ」

高志が苦しげに呻く。

「高志くん、みんな、待つてなさい! すぐに助けるからっ!」

「すぐ……だと? 言つてくれるなっ」

ヤギの頭をもつ悪魔がせせら笑う。

「お前になんか何も守れるはずがない。教会のパパアどもが死ぬ前に何と言つたか知りたいか? 助けてくれえ、ヤギなんかにどうでも良いからア……だとよ。所詮、人間なんざ我が身が一番可愛いんだ」

「黙りなさい!」

瞬間、希美の身体を目映い燐光が包

み、それが収束したあとに佇む希美はその姿を変えていた。光の中から現れたのは悪魔を屠る御使いだ。

「シスターの仇……。あなたを絶対、許しませんっ!」

「セイント・エクティス……お前から臭うぞ。人ならざる者の力が。お前を喰らい、ここにいるガキどもをすべて喰らい、俺はさらなる高位の悪魔になつてやるのだああああ!!」

悪魔は叫ぶと、コウモリのような羽を大きく動かす。

「いくぞおとおおとおお!」

ヤギ頭が襲い来る。

希美は手を高々とかがげれば穂先に十字架をあしらった槍を創造する。

「永劫の闇へ、去りなさい」

ヤギ頭が大きく豪腕を振り下ろすと同時に、槍を閃かせる。

希美と悪魔がすれ違う。互いに背中を向けあつたまま、しばらくの静寂が流れた——刹那。

「……ガッ……ガアア……っ」

悪魔が悶絶する。

希美の槍の穂先に胸が貫かれていた。美しい煌めきが悪魔の肉体を蝕み、のみ込んでいく。

希美は少し息を乱さず、その様子を静かな眼差しで見つめる。

「ギィィィィエエエエ……!」

ヤギ頭の身体はポロポロの灰になつて消えていった。

(悪魔の気配は……もう、ないみたい

ね) 槍を消した希美は高志のもとへ駆けだす。

「高志くん、大丈夫!」

苦しそうに呻き続ける少年を、希美は抱きしめる。

「ごめんね、お姉ちゃん……っ」腕の中で高志がか細い声を漏らす。こうなつてしまったことに対して罪悪感を覚えているのか。少年の健気さに胸に熱いものがこみあげる。

「あなたが謝ることなんてないのよ。悪いのは全部、あいつらなんだからっ」

「——違うよ。せつかくの記念日なのに、あいつが無粋なことしちゃつて」

「え……?」

「——まったく、調子にのつてくれるよね。段取りすら満足に覚えられない三下が……」

「高志、くん……?」

信じられない光景を前に精神に異常を来したのか。

「まあでも、あいつの気持ちも分からなくはないんだ。お姉ちゃんみたいにすごい力を前にしたら我を忘れるの……僕ですらそれに耐えるのに何年もかかったんだし」

そう言つて顔をあげた高志の顔に、その目は真つ赤に輝いていた。

(う、嘘……)

「全部、現実だよ」

不気味な赤い眼をカッと見開き、高志は嗤う。

「悪魔! 高志くんの身体から出なさいっ!」

希美は再び生み出した槍の穂先を高志の喉元に突きつけた。

「お姉ちゃん、ひどいよ……。僕に悪魔が取り憑いてるなんて……」

「だっ、黙りなさい! ……い、今なら殺さないであげる。あなたが生き残る道はただ一つ……高志くんの身体を解放することよ」

「違うつたら……。悪魔が取り憑いてるんじゃないよ。僕自身が悪魔なんだ」

高志が掌を突きだした

「……っ!」

全身に激震が走る。

(あ、熱い……っ)

下腹のあたりが急速に熱を持つ。嫌な汗をかいてしまうようなじっとりとした熱。それと共に剥き出しのお腹から赤い閃光が迸る。

(何なの!?)

柔らかな下腹に現れたのは様々な図形を組み合わせた紋様。それはまるで翼を広げた鳥だ。

「淫紋……僕たちはそう言つてる。お姉ちゃんの中に長い長い時間をかけて浸透させた魔力がね、今日……ついに、満ちるんだ。今日は僕とお姉ちゃんにとつて忘れられない記念日になるんだよ。フフ」

「嘘……嘘よ、あなたが、悪魔なんて! そんなこと、あるわけないっ!」

しかし高志から溢れる邪気は決して悪魔が取り憑いたわけではないことを示

していた。それでも希美はその事実を受け入れられなかった。

「お姉ちゃんを手に入れるためだよ。子どもの姿になって、長い時間を過ごした。最初は大変だったよ。教会の空気にあてられて何度も気分が悪くなっちゃったから。でも、それのお陰で誰にも邪魔されずお姉ちゃんと二人きりにもなれたから良かったけどね」

「そんなこと信じないわっ!!」

これまで過ごしてきた時間がすべて偽り——そんなことは受け入れられるはずがない。

高志の掌と、希美の下腹の紋様とが共鳴するように輝く。

「ヒィッ!?!」

瞬間、甘い疼きが下半身に流れた。「この力を使うためにシスターたちを殺し、その生き血を吸ったんだ。その甲斐はあったみたいだね。力が満ちているのが分かるんだ」

高志の手が灑んだ光を発すれば、紋様もさらに鮮やかさを増す。

ドクンッ! 下腹に浮かび上がった紋様がまるで血管のごとく脈打った。

「ん……っ!?!」

下半身に溜まる痺れが熱を帯びれば鼻にかかった吐息がこぼれた。

(こっ、これは……)

切なさすら帯び始めた感覚は、近頃希美を懊悩させるものに他ならない。

(何が、起きてるのっ!?)

焦る心とは裏腹に身体はどんどん忌まわしい火照りに包まれていく。どれ

ほど落ち着けと言いつ聞かせても、妖しい感覚は決して遠ざかってくれない。

「お姉ちゃん、辛いでしょ。お股を弄りたくてしょうがないんでしょ?」

「高志くん、やめて、そんなこと、言ってはダメっ!」

「僕ね、知ってるんだよ。最近、お姉ちゃん、夜中、自分のベッドでお股の奥を弄ってるよね?」

「っ!?!」

驚きと羞恥心に耳が熱くなる。

「隠さないで。僕はお姉ちゃんのことなら何でも知ってるんだ。お姉ちゃん

はエッチな気持ちになるのがいけないことだって思いながら、耐えきれずに弄るんだよね。でもね、それはお姉ちゃんが悪いんじゃない。僕の魔力が熟

成されていったからなんだ」

(本当に、高志くんが悪魔? いえ、そんなことあるはずない! 高志くんは人間よ! 操られてるんだわ、そうに決まってる!!)

「お姉ちゃん、苦しみから解放してあげる。ねえ、オナニー見せてよ」

「高志くん、やめなさいっ……んっ!」

声をあげると、それが身体中に響き、ビクンと全身が戦慄く。

高志が近づくと、耳元で囁く。

「あいつらに見せてやってよ。大人の女つてもんがどんなものかを。……やらないと、殺しちゃうよ?」

驚きのあまり呼吸が浅くなる。

「それが、あなたの狙いのなの?」

「え?」

「そうすれば、高志くんを解放するのねっ!」

「お姉ちゃん、僕はさあ………まあいいよ。お姉ちゃんがそう思いたいのならね。さあ、自由にしてあげる」

「そつと触れられると、それまで動か

なかつた肉体が自由になる。

「それじゃあ、やってみせて」

奥歯を噛みしめる。すでもどかし

いほどの切なさは抑えきれないほど膨らんでいた。

(熱い、身体が、どうしようもなく……)

かすかに潤んだ眼差しで檻に閉じ込められた子どもたちを見る。子どもたちは何が起ころうとしているのか分からず戸惑いに泣き叫ぶ。

「大丈夫、だから! あなたたちは、絶対にお姉ちゃんが助けるからっ!」

そう笑顔を見せた希美はゆつくりと右手をはききれんばかりに実っしてしまっている胸においた。

「ああっ」

たつたそれだけで甘い声が出てしま

う。いつもとは違つた。身体がまるで別人のもののように敏感になっている。

「お姉ちゃん、あいかわらず良い声だね。僕、それを聞いているだけでムズムズしてくるんだ」

左手を股の間にゆつくり滑り込ませ、撫でれば、「んんっ!」と上擦つた声が出た。

さらにスカートの中のボディースーツ

には染みが浮いていた。

(ああ、こんなこと今までなかったのに………やっぱり、この模様のせい?)

自分の身体に生々しく刻まれたタトゥーを見る。それは不気味に赤黒く発光し続けていた。

(負けない。こんな、悪魔の卑劣な異

なんかには負けられない! 子どもたちを、高志くんを助けるのよっ!)

それこそが自分に課せられた使命。希美は胸を握る手に力を入れる。

「あああっ!」

ビクンッと感電したみたいに全身が跳ねる。

「すごいね、お姉ちゃん。乳首がスーッごしにもはつきり分かるくらい勃起しちゃうてるね! すつごく昂奮してるんだね!」

希美は胸元のコスチュームをたくしあげ、直に乳首を摘んだ。

「あああんっ!」

これまでにないショックに仰け反つてしまふ。

檻の中の子どもたちを見る。さつき

まで泣き叫んでいた男の子たちが恥ずかしげにこちらをチラチラと見ている。

その視線に身体が羞恥心に火照り、たまらず目を伏せてしまふ。

(ああ、子どもたちが見ているのに私はなんてことを……っ)

「まだ終わりにやないでしょ、お姉ちゃん。さつさと続けて」

希美は恐る恐るスカートの手に差し入れた。



「ひいっ！」

秘処のあたりに触れただけで、悶絶に全身が慄然とした。

大切な場所が燃えるように疼き、投げ出している両足が伸びきる。

(も、もう、触りたくない……)

「アアッ……ハアッ……ンン……ッ」

(でも、触らなかつたら子どもたちも高志くんも助けられない……っ、やるのよ、希美！)

ももぞと身動き、もう一度、敏感な割れ目をなぞる。

「ひい……っ！」

今まであげたことのない嬌声を体育館に響かせてしまう。

直後、まるでお漏らしでもしたいみたいに溢れた粘汁でボディスーツの汚れがさらに広がってしまう。

「お姉ちゃん、エッチなおつゆがたくさん出たね。そんなに気持ちよくなってくれて嬉しいよ」

淫らな熱気に触まれ、頬が、首筋が、耳が茹だるようで、頭がクラクラしてしまう。

なのに指はさらに豊胸の丸みを歪ませ、愛液に汚れた肉裂を引っ掻くのをやめられなかった。クチクチュクという水音が大きくなる。

「んっ……あぁっ……はぁぁっ……んんっ……あぁっ……はぁぁっ……」

いつもならば多少の刺激で落ち着くはずなのに、刺激するたび、こみあげた淫らな情欲は去るどころかますます激しくなってしまう。

(こんなはしたないこと、やってはダメなのに……)

神の御前で清らかな身体のまま修道女として一生を貞淑に過ごすことを、淫らな欲望に染まらぬと誓ったはずなのに。身体は自慰という名の底なしの欲望に抗えない。

「違う！ そんなこと、ない！ これは欲望のためではないから……！」

心の中の葛藤が声に出ていることに気づかないまま、希美は秘処を乳房を荒々しくまさぐった。

乳首は指先に刺さりそうなくらいそそり勃ち、秘処を激しくかき回す指先に水飴のように粘りを強くしたとろみが絡みつく。その背徳の潤滑油がさらに無垢なシスターの理性を乱す。

「あああつ！ だめえっ！ んっ……んんっ……ど、どうして……手が、とまらないっ！」

懊悩のあまり舌つ足らずな声になる。子どもたちがどんな顔で、欲望に流され続ける自分を見ているのか、それを思うと怖かった。

「それはね、お姉ちゃんがいやらしいからだよ。だって、今のお姉ちゃんの身体はお姉ちゃんの自由なんだから」

「違う！ これは助けるため！ 守るためっ！ 貪ってるんじゃないわ！ 私に決して墮落しない……ひいひいっ！」

指先が無意識に敏感な陰核に触れた瞬間、頭が真っ白になり、全身が痙攣

に呑み込まれる。

(これで、お、終わり……)

ガクガクと全身を激しく揺らしながら、そう思った矢先。紋様が輝きを放てば、発散されていこうとした疼きがさらに強まってしまう。

「どっ、どうしてっ!!」

ここ最近、希美を狂おしくさせる疼きはいつも、あの宙に浮くような心地を味わえば鎮まるはずだった。だが、今日ばかりは終わらない。むしろ一度、快楽の頂を極めたことで、さらに欲望が強まるかのよう。

(手を……手を止めなければっ！) これ以上は、子どもたちを助けるためではない。欲望に目が眩んだことになる。大罪を犯してしまう。

だが、いつも発揮されるだろう強靱な理性はこの時ばかりは空回りしてしまう。

いつまでもボディスーツごしではもどかしいとばかりに、半ば無意識に下着を太ももの半ばまでずり下げた状態で指をひくつく膣内に埋め、知ってしまった陰核の快楽を再び味わおうと転がしてしまう。

「ひぎひぎひぎひぎ!!」

目尻に涙の粒を膨らませた希美は汗を飛び散らせて仰け反った。

自分の指先であるはずなのに、まるで他人にまさぐられていくかのような容赦のない愛撫に快楽の矢が性感に突き刺さった。

息の詰まるような恍惚感に悶絶して

も手を止められない。

「いやあつ！ どうしてっ！ どうして……なの……!!」

赤い紋様がまるで本当に羽ばたいて見える。

(違う、模様が、大きく!!) それは目の錯覚なのか。その矢先、再び陰核をみずから潰すことで、秘裂の奥、深い場所でも何かが爆ぜた。

(ダメッ……またあつ、き、きてしまえ……っ！) 「く、くるう、ああああ……きちやうううううう！」

口の中に血が滲むくらい唇を噛みしめた直後、またもや頭の中が閃光に呑まれてしまう。

「んんんんん……っ!!」

それと共に、排泄欲求が膨らむ。慌てて括約筋に力を入れても遅かった。

プシャッ、プシャアアッ！ 「ああつ、いやつ、いやああああああああああ……っ！」

高々ともちあげた下半身、そこから勢いよくしぶきががががっしてしまう。

「すごい、潮吹きだ！」

高志が目輝かせてはしゃぐ。

「あああつ、い、いやああ……!!」

動揺に声の上擦り、愉悅に震える肌が粟立ち、開いた毛穴から玉の汗が噴き出す。

「ふぁっ……あつ……はぁぁっ……」

緊張した全身から力が抜け、ぐったりしてしまふ。

護符…？



これを  
使えって？

このフロア  
地上から遠イ  
人間見つかったら  
魔物に喰われル

……

そのまま歩いてモ  
今日中にオークの  
居住区着かないぞ

—ちょうど一ヶ月前

友人のアルフラが



『オークの宝』とやらを  
取りに行ったきり  
帰って来なくなった



世間知らずなアーチャー少女が  
ゴブリンと一緒に探検した結果

# 地獄の森と淫の罖

漫画/ユズリハ  
COMIC  
好評にお応えして再登場!

世間知らずの  
エリザは来るな  
なんて言っておいて…



わっ



な…っ  
なによこれ!

安心シロ  
運行証代わりダ

ソレで弱メの魔物  
襲ってこナイ

そう…なの？  
へんな模様…



ホントは  
嫌だけど…



とにかく  
急がないと…









でもオマエ  
体力なさすぎル

護符の効果  
強めルとコレに  
更に体力奪われル

あっ…

コイツ何触ってるのよ…っ



ちか…  
みち…?

護符の効果  
強けれバ

危ない魔物  
無視シテ  
近い道連れル

…というか



ホントに近道  
できるんでしょ…うね…



ゴブリンの  
くせに…っ

決まりましたナ

なんだ？

護符のチカラ  
強くなるのか？

は？  
ちょっと何…っ

ヤルなら  
早いほうがイイ

そのまき  
じつじつ口

オイ  
コツチダ

へ？

こしゅ

こしゅ





小説  
NOVEL

あまくさしろ  
天草白

挿絵  
ILLUSTRATION

ど  
かゆみ止め

淫紋を施された魔法少女を襲う発情快樂の嵐！



魔法少女  
ミステックプリム  
MYSTIC PRIM

~清純乙女は淫紋に墮とされる~

夜の繁華街に阿鼻叫喚がこだまする。それぞれがカマキリ、アリ、クモを模した三体の異形が人々を襲っていた。紋章の魔物。

数か月前に突然人間社会に宣戦布告してきた悪の魔術結社「ヘブンズシャドウ」が操る魔物たちの総称だ。

名称の由来は怪物たちがいずれも体のどこかに紋章のようなマークをつけているからである。

魔物の一体——クモの姿をしたスパイダークレストの下腹部に描かれた紋章が輝きを発した。次の瞬間、紅蓮の火線が一直線に伸び、道路を爆裂させながら薙ぎ払った。

魔術。そうとしか言えない超常の力を、この怪物たちは操るのだ。

さらに伸びた火線が人々を呑みこもうとした刹那、横合いから放たれた白い輝きがそれを打ち消した。

「誰だ、俺たちの邪魔をする奴は！」  
大量殺人を防がれた魔物が、不快げに振り返った。

「そこまでですわ、ヘブンズシャドウの魔物たち！」

凛とした声が響く。月灯りを背に一人の少女が颯爽と歩み出た。

夜闇に溶けこむような長い黒髪と神秘的な印象を与える紫がかつた瞳が、気品のある美貌に彩りを添える。

モデル顔負けの均整の取れた肢体にまとうのは、名門として名高い聖ラシーヌ女学院のブレザー制服。

その右手には長さ三十センチほどの

棒を携えていた。

「聖なる杖よ、我が描きし陣にて魔を滅する光をもたらせ。我が描きし姿にて魔を打ち砕く力を与えよ」

彼女——如月朋花が呪文とともに右手の棒を一振りすると、たちまち長大な杖へと変化した。

振るった杖が描く極彩色の軌跡は、美しい紋章にも似た魔法陣となつて、その体を包みこんだ。

次の瞬間、制服が無数の光の粒子となつて弾け飛ぶ。現れた裸身はまばゆいほどに白く、乙女らしい清冽さを漂わせていた。

それでいて思春期の少女から大人の女へと変わる過渡期を示すように、Fカップを誇る胸の双丘はたわわに揺れ、淡い桃色の乳首が可憐に揺れている。

腰のくびれは折れそうなほど細く、そこからまるやかなカーブを描き、美しいヒップラインを顕現している。

極上ともいえるオールヌードが露わになつていたのはほんの一瞬の間だけだった。

魔物がその眼福にあずかる暇もなく、次の瞬間には彼女の肢体を魔法少女の衣装が包んでいる。

風にはためくスカーフやフレアースカートなど、全体的には女子校生の制服を連想させるデザインだ。

細身の体つきやそれに相反して豊かに膨らんだ胸のラインが、コスチュームの薄い生地を通して浮き上がっている。すらりとした脚は膝上まで黒いブ

ーツに覆われていた。

「魔法少女ミステックプリム！ 邪悪な魔物は聖なる光で浄化いたしますわ！」

「ふん、魔法少女を名乗るにしても、少し年齢がいつているようだな」  
「なっ……！ わ、私はまだ十代よっ」

魔物の擲楯に朋花——ミステックプリムは一瞬言葉を詰まらせた。

確かに魔法少女という言葉からは、十代前半くらいをイメージするのかもしれない。

だが彼女とて花も恥じらう十代の乙女である。まるで年かきの女のように言われるのは心外だった。

「と、とにかく。私が来たからには、あなたたちを浄化しますっ」

気を取り直してプリムは叫んだ。  
「浄化だと、生意気な！」  
「噛み砕いてやるぜ、女あ！」

カマキリの姿をしたマンティクスレストとアリの化け物であるアントクレストが左右から襲いかかる。

いずれも残像ができるほどの、すさまじい速度の攻撃だ。

「遅いですわ」  
だがプリムの動きはさらにその上を行く。魔力で倍加させた身体能力で、マンティクスレストの両腕のカマを、アントクレストの噛みつきを、いずれも易々と避けてみせた。

「おっと、そこまでだ！ このガキの命が惜しかったらなあ」

クモの魔物の節足が逃げ遅れた子ども

も捕まえていた。魔物の力をもってすれば、その体を捻り潰すことなど容易いだろう。

「動けばガキを殺す」

陳腐な脅し文句だが、実際にプリムが抵抗すれば魔物は躊躇なく子どもを殺すだろう。

「我が魔力もて刻め魔紋」

スパイダークレストの呪文とともに、中空からあふれた光がミステックプリムめがけて降り注いだ。

「……んっ？！ く、はあっ……!？」

体全体が甘痒く痺れるような、痛みとも甘美ともつかない強烈な衝撃が魔法少女を襲った。光は下腹部の辺りに収束し、肌の上に紋様を描き出す。

魔紋——クレストモンスタが操る紋章魔術による呪いの刻印だ。

紋様が浮かび上がった瞬間、プリムは強烈な脱力感を覚えた。相手を弱体化させる魔紋だろうか。

「今のお前になら勝てそうだな。こいつを食らって消え去れ！」

スパイダークレストが虚空から漆黒のエネルギー弾を召喚する。だが、

「弾きなさい、聖なる壁よ」  
プリムは弱体化の影響などものともせず、杖で前方に描き出した魔法の壁で易々と魔弾を弾き返した。

「なんだと!? ミサイルに匹敵する威力を持つ俺の魔弾が——」

「たとえ呪いを受けようとも関係ありません！ 悪の力では、私の魔力障壁は決して貫けません！」



プリムは凛と告げると、魔物の動揺を逃さず魔力の刃を放つ。子どもを捕えた節足を切断し、解放させた。

「さあ、終わりの刻ですわ。魔に導かれし哀れなる者たちよ、清浄なる存在へと返りなさい！ 聖なる光、ミステック・ホーリーライト！」

プリムの放つ浄化の輝きが、カマキリとアリの魔物を包み、その巨体を霧散させた。

いや、戻ったのだ。魔術によって怪物化されていた昆虫たちが、元の無害な存在へと――。

「ひ、ひいっ」

だがスパイダークレストだけはいち早く光の効果範囲から逃れ、一目散に去っていく。

「……一体、逃がしてしまつたわね」  
プリムは悔しげに唇を噛みしめた。

聖ラシーヌ女学院――。

良家の子女だけが通うお嬢様学校として知られる名門校であり、朋花が通う学び舎でもある。

「ごきげんよう、みなさん」

学舎の象徴ともいえる黄金色に彩られた校門をくぐったところで、朋花は周囲の女生徒たちに朝の挨拶をした。

「ごきげんよう、朋花さん」

「見て、朋花お姉さまよ……」

「今日もお美しいです……」

同級生も、上級生や下級生も、一樣にうつとりした顔で朋花を見つめる。

ここ聖ラシーヌ女学院において、校内ナンバーワンの美少女と名高い朋花は彼女たちにとつてアイドルのような存在だ。

「ところで昨晚、繁華街に魔物が現れたようですが……朋花さんは大丈夫でしたか？」

「……ええ、ご心配なく」

同級生の一人が問いかけてきて、朋花は会釈を返した。その笑みがわずかにこわばつたのを、気づいた者はいないだろう。

彼女が魔法少女ミスティックプリムとして戦っていることは誰にも秘密だった。もしも彼女の正体が知られてしまえば、悪の魔術結社へブンズシャドウはきつと朋花の周囲にまで魔の手を伸ばすだろう。

卑劣にも人質として利用するかもしれないし、報復として危害を加えたり、陵辱、最悪の場合は殺害されることも考えられる。

だからこそ、朋花は自分の正体を誰にも語つたことはない。

変身時は認識を阻害する魔法を同時にかけているため、目撃されたところで正体を知られる恐れはなかった。

後は朋花が日常生活で口外しなければ、秘密を守られる。

「……く、うう……」

そのとき――ふいに全身を強烈な脱力感が襲った。膝から崩れ落ちそうになり、慌てて踏ん張る朋花。

「どうなさいました、朋花さん？」

「い、いえ、軽い貧血のようですわ」  
心配する同級生に、朋花は会釈を返す。昨日の魔紋の影響がまだ残っているのだろうか。あるいは魔力の消耗が激しかったせいかもしれない。

視界が回転するような錯覚とともに訪れるめまい。そして両足から崩れ落ちそうになるような虚脱感。

敵の魔物も目を追うごとに力を増している。今まで以上に激戦が続き、朋花の消耗の度合いもそれに比例して激しくなっているのだ。

（それでも、私は一人で戦い続けてみせる――あの人の分まで）

平穏な日常を過ごす学院の女生徒たちを見つめながら、朋花は決意を新たにした。

――彼女が魔法少女の力を得たのは半ば偶然であり、言いかえればそれは運命とも言えた。

「だ、大丈夫ですか、しつかりしてください！」

数か月前、下校途中だった朋花は公園で行き倒れになっている一人の女性を発見した。

古ぼけたフードとマントという、まるでおとぎ話の魔法使いのような格好をした妙齢の女性。

いや、事実彼女は現代に生きる『魔法使い』だった。

魔法を研究する秘密結社――ヘブンズシャドウに所属していたが、とある

悪の魔法使いが結社を掌握。魔物の軍勢を操り、その力で世界を征服すべく乗り出した。

彼女はそれを阻止すべく戦ったが力及ばず、逃げてきたのだという。

魔法だの魔物だの、にわかには信じられない話だった。

だが、血まみれで虫の息の彼女の言葉には、それを荒唐無稽だと断じるこ

とができない真実味があった。

「私はもう……長くないわ。だけどやつと見つけた……魔力の素養を持つ少女……あなたが、なるのよ……悪を清め、浄化する戦士に……」

途切れ途切れに吐き出される言葉の意味は、朋花にはほとんど理解できなかった。

「急いで……奴らはもうすぐにも……：侵攻を開始する……平和に生きている人たちの魂を汚し、食らい……世界に混乱をもたらす……それを止められるのは魔法の力を秘めた乙女――すなわち『魔法少女』のみ……」

「逃がさんぞ、裏切り者め！」

そのとき、公園に怒号が響き渡つた。体長数メートルはあろうかという異形の怪物が現れる。

朋花が生まれて初めて出会う、魔物――クレストモンスターだ。

「ば、化け物……!？」

「戦いなさい、『プリム』の力で……」  
女魔法使いが血まみれの手で三十センチほどの棒を差し出した。

朋花は無我夢中でその棒をつかむ。

とたんに、無数のイメージが——数々の魔法の知識が、まるで最初から知っていたかのように、脳内に広がる。「それは魔法の杖であり、魔法情報のすべてをあなたに伝えるデータベースでもある……さあ、変身……を……」

朋花は右手の棒をジッと見つめた。つぶらな瞳に決意の光を灯し、棒を構える。

「聖なる杖よ、我が描きし陣にて魔を滅する光をもたらせ。我が描きし姿にて魔を打ち砕く力を与えよ」

長大な杖へと変化した棒を振るい、呪文を唱え、朋花は魔法少女ミステックプリムに変身した。

こうして、悪の魔術結社へブンスイヤドウトとの戦いは幕を開けた——。

(あの魔法使いの女性は病院に運んだけれど、助からなかった……そして私は今も、一人で戦い続けて——)

自分が魔法少女となったあの日の回想は、突然の悲鳴によって遮られた。「さやあああつ、助けてえっ!」

振り返った朋花の視界に、逃げ惑う女生徒たちの姿が映る。

そして、それを追う巨大なクモの魔物——昨日、仕留め損ねたスパイダークレストが校門付近にいた。

「みなさん、早く逃げてください!」

朋花は生徒たちを逃がしつつ、自らはその場に残り、魔物と対峙した。「昨日の今日でまたお出ましとは、し

つこいですわね」

朋花が凛と言い放った。吹きすさぶ風で長い黒髪がたなびく。

「くくく、お前に負けて逃げ帰った屈辱と、仲間二人の仇を取りたくてなァ。傷を癒やすのもそこそこに、こうして舞い戻ってきたってわけだ」

スパイダークレストは口吻部を震わせながら笑った。

朋花は杖を取り出し、空中に魔法陣を描いた。プレザーが光の粒子となつて舞い散り、魔法少女のコスチュームへと変化して、ふたたび装着される。

「魔法少女ミステックプリム! 邪悪な魔物は聖なる光で浄化いたしますわ!」

ミステックプリムへと変身を終えた彼女は、クモの魔物と対峙した。

「死ね、ミステックプリム!」

魔物が怒号とともに八つの脚を次々と繰り出す。コンクリートをも貫く威力を持ち、音速に匹敵するスピードを備えた連続攻撃がプリムに迫った。

「無駄ですわね。現れ出でよ、光の障壁——フラッシュウォール!」

プリムの杖が虚空に複雑な模様を描いた。簡易魔法陣だ。彼女の前方に光の壁が出現し、魔物の節足をことごとく弾き返す。

「くっ、なんて硬さだ」

渾身の連撃を跳ね返された魔物の体勢が大きく崩れた。その隙を、百戦錬磨の魔法少女は見逃さない。

「さあ、消えなさい魔物! ミステイ

ック・ホーリーライト!」

杖から放った青い浄化の光がスパイダークレストの全身を包みこんだ。

だが本来なら魔物の邪悪な魔力を塗りつぶし、清らかなエネルギーへと変換するはずの輝きが、あっさり霧散してしまふ。

「そんな!? どうしてですか——」

今まで何十という魔物を浄化してきた無敵の魔法を破られ、プリムは動揺を隠せなかった。

「ケケケケ、どうした? 当てが外れたか、ミステックプリム?」

クモの魔物は勝ち誇ったようにおぞましい巨体を揺すった。ふたたび節足による連続攻撃を放つ。

「だけどあなたの攻撃だって、私には通じませ——えっ!」

プリムはすかさず先ほどのように魔力障壁を展開する。だが、今度は魔物の足が簡単に障壁を打ち砕いた。

「さやあつ……!」

衝撃波でプリムは大きく弾き飛ばされる。クモの魔物は口吻部から白い糸を吐き出した。

「う、動けないっ……!?!」

プリムの四肢は白い糸によつて完全に縛りつけられていた。

両手両足の自由を奪われ、まさしくクモの巣に捕らわれた獲物のように、空中で襟状態にされてしまふ。

大の字に開かされた四肢は、触手が固く巻きついてほとんど動かすこともできない。

「俺の勝ちだな、ミステックプリム」

「こ、こんな相手に、私が……どうしてえ……っ?! ああつ……!」

前回は圧勝だったし、本来なら負けるはずのない相手である。

にもかかわらず、一方的に打ち負かされてしまふ理不尽さにプリムは動揺を隠せなかった。

「たつた一日でこんなに強く——」

「くくく、違うな。俺様が強くなったんじゃない。お前が弱くなったんだ」

魔物が愉快げに巨体を揺らした。

「お前の体に刻まれた魔紋には二つの効果があるんだ。宿主の魔力を吸い取るのが、そのうちのひとつ。お前は知らず知らずのうちに魔紋に大量の魔力を吸われ、俺と戦うときにはすでにガス欠状態だつたってわけだ」

「それで簡単に防衛魔法を破られてしまったのですわ……!」

「そしてもう一つの効果が——これだ! ラプス・グルス・ジーガ!」

クモの魔物が高らかに呪文を唱える。とたんに、プリムの下腹に浮かぶ紋様が輝きを増した。

「はぐ、う……か、体が、熱い」

「宿主の性感を加速し、発達させ、発情させる淫紋だ。さあて、どうやっていたぶってやるうか」

スパイダークレストの視線に籠もっているのは殺気などではない。魔法少女の衣装を通して、肌に絡みつくような粘ついた視線が示しているのは——

明らか欲望だった。



魔物は人間の女を好んで犯し、時には孕ませることがあることを、プリムは知っていた。

「くくく、裸にひん剥いてやるのめい、魔法少女のコスチュームのままで犯してやるのも捨てがたいか」

そんな不吉な予感を裏付けるように、魔物がほくそ笑んだ。

腰の辺りに視線を向けると、黒々とした肉塊が膨らみながら起き上つてくる場所だった。茸のように傘の張り出した巨大な亀頭。不気味な血管がのたくる幹。魔物のペニスだ。

（嘘、男の人のアレ……ですかしら？ あんな大きくて、いやらしい形をしているなんて……）

魔物はもちろん人間の男性のそこをまともに見るのは初めてである。

保健体育の授業などで図解を目にしたことはあるものの、実物の迫力や生々しさ、何よりもグロテスクさは段違いだった。

黒い肉根の先端部から透明の粘液がツーツと垂れ、むせ返るように強烈な牡臭をまき散らす。

「今までに数えきれないくらい人間の女を犯してきた逸品だ。お前もこいつで気持ちよくしてやるからなあ」

「ふ、ふざけないでくださいませっ。魔物を相手に気持ちよくなんて！」

「それがなつちまうんだよなあ。そうら、発動しろ。『妖しの淫紋』！」

魔物が高らかに叫ぶと同時に、プリムの下腹部に妖しい熱が宿り出す。

「う、くうっ?! これは……?!」

魔法少女の衣装を透かして、下腹がポウツと光っている。肌の上に何かが奇妙な紋様が浮かび上がっていた。

女性の子宮を思わせる紋様。全体が毒々しいまでに赤黒く、脈を打つように明滅を繰り返している。

その明滅に合わせて、プリムの下腹の火照りがさらに増した。

両足の付け根がじんわりと疼き、秘孔の奥がジユクジユクと潤んでくるような妖しい感覚が生じる。

（私の体、変になっていきますわ……熱くて、体の奥が甘つたるく……?!）

「じゃあ、始めるとするか！ くくく、この前の礼だ！ たつぶりいたぶつてやるからなあ！」

スパイダークレストがさらに触手を吐き出した。ヘビのようにのたくる触手群は空中でうねりながら、プリムの胸元や股間に殺到する。

まず数本の触手が豊かに膨らんだ胸の双丘に絡みついた。乳房の周辺に沿って巻きつき、ギユツと絞る。熱く、甘い衝撃が胸の芯にまで響き渡った。

触手にグイッと絞られ、衣装の上から美しいバスタの形が浮き上がる。

「嫌あ、触らないでえっ……!! や、やめてください……っ!!」

魔法少女の誇りの象徴であるコスチュームが淫靡な衣装に様変わりさせられた屈辱に、強く唇を噛みしめた。

薄い布地を内側からいやらしい突起が押し上げ、いわゆる胸ポチ状態にな

っていた。衣装の上からでも左右の乳首が硬くしこっているのが分かる。

「くくく、魔物におっぱいを弄られながら感じてやがるのか？ 清纯そうな顔した魔法少女も、根は淫乱なんだなあ！ くはははは！」

「ち、違いますわ！ そんなはず……ああ、うう、あんっ！ ありませ、わ、私が、魔物を相手に、そんな……あひ、いい、んっ！」

慌てて否定しようとしたところで、さらに乳房の快感が増した。たまたま嬌声が漏れ、囚らずも魔物の言葉を肯定する結果となってしまう。

「おかしな魔術で私の体をこんなふう……あなたは卑怯者ですわ！」

プリムは魔物をにらみ、さらに下腹に浮かび上がる忌々しい淫紋を見据えた。すべての元凶が、簡易魔法陣を兼ねたこの紋様だということは察しがついている。

だが両手両足を拘束されたうえに、湧き上がる快感で魔法発動の精神集中さえままならない現状ではどうしようもなかった。

「次はオマンコも弄つてやるぜ。くくく、気持ちよくて気が狂わないように気をつけるよ？」

「あつ、ぐうううううっ!!」

魔物の言葉が終わるか終わらないかのうちに、乳房を責めているのとは別の触手群が股間を撫でつけた。

鞭毛が生えた先端部でコスチュームの上から内ももをなぞり、そのまま股

間部を這い回る。

くすぐったさとも、気持ちよさともつかない妖しい快感が背筋をゾクリと震わせた。

「さあ、そろそろ本番といくか。俺のチンポを欲しそうにオマンコがゴダレを垂らしてやがるぜ……ぐへへ」

「や、やめ、ふああ……だめ、です……ん、ああ、ん……あ、んっ……」

懇願するプリムの弱々しい声には抑えきれない喘ぎが混じっていた。

「やめてだど？ 本当にやめてほしいのか？ お前は俺にやられることを本心では望んでるんじゃないのか？」

「おかしなことを言わないでください！ だ、誰が魔物に犯されることなんて……ん、くはっ?!」

猛然と言いつ返しとしたりと、全身を甘痒い電流が走り抜けた。

下腹の淫紋がより強い輝きを放っている。ずきん、ずきん、と腰の芯が熱い脈を打つように疼いた。

「わ、私は……望んでなど……んっ、いるものですか……はぐ、ううううっ!! お、ふあ、おおっ……!!」

秘孔から子宮にかけて妖しい痺れが広がっていく。純潔を捧げたい——理性とは無関係に、原始的な牝の欲求が意識を淫らに染めていく。

「誰が……あなたに、なんて……っ」

プリムはそれでも絞り出すような声を発する。唇がわなわなと震え、両足の付け根からは洪水のような愛液がこぼれ、糸を引いて垂れ落ちた。

妖鬼淫紋調伏

小説 / ウナル 挿絵 / 田嶋有紀

NOVEL ILLUSTRATION

たじまゆうき

気高き妖鬼が淫紋で発情屈服!





甘いうめき声と共に熱い液が体内に満ちていく。まだ年端もいかない少年の華を散らした実感に、天逆の額の二本の角も艶を増した。

「出してしまったのう。ふふつ、武士を志そうという者が情けない。しかし、それも必然よな。妾は美しすぎるが故。ほれ二発めじや」

わずかな腰の動きだけで少年は射精を重ねてしまう。それを見下ろしながら放蕩の鬼神は黒髪をかき上げた。

言うまでもないことだが、天逆の美しさは天下に並ぶものがない。

肌は白磁のように透き通り、腰を越える長い髪は墨を流したような艶やかさだ。そんな彼女に似合う衣装などそうそうあるはずもなく、高名な織り師に作らせた赤と黒の大振袖によってなんとか美貌の添え物としていた。その肉はうつつらと脂肪を残して至福の抱き心地を約束し、それでいて引き締まった力強さを保っている。

女を女たらしめる乳房に至っては西瓜のような大きさだ。女から生まれた男なら誰であろうとむしやぶりつきたくなるのが性であろう。尻もたつぷりと柔肉を蓄え、触れれば指がどこまでも沈み込んでしまう。

鬼の象徴たる二本の角もまるで宝玉のような輝きで、その角に貫かれたという者さえ現れる始末だ。

そんな男たちの理想である肉体を天逆は五百年にわたり保ち続けている。醜悪な老いも美しさを損ねる傷も、彼

女には無縁の事柄なのだ。

「ふふつ、青い果実を齧るのは本当に愉快じゃのう。さあまだまだ愉しませ貰うぞ？」

「も、もう止め……止めてください」  
息も絶え絶えに少年が懇願する。筆卸しから抜かずの二発連射、まだ童子ともいえる年頃には辛いのだろう。

「安心するがいい。これを飲めば全てを忘れて妾を求めようになる」

天逆の手には一つの小瓶が握られていた。怪しげな薬瓶に少年の顔が引きつる。それを肴に天逆は嗜虐的な笑みを浮かべた。

「これは妖術師の間で伝わる秘薬で、名を聞けば妖怪すら恐怖に顔を青ざめる一品じゃ。男なら枯れ果てるまで精を出してなお収まらず、女なら常に何かを啜っておらねば気が狂う」

口から覗かせた牙に少年の顔が恐怖に染まる。それを肴にしつつ天逆は薬瓶の蓋に手をかけた。

次の瞬間、天逆は寝室の天井を突き破り外へと飛び出した。わずかに遅れ無数の札が部屋に飛び込む。

「今宵は随分と手下を連れてきたではないか。田原堂馬よ」

館の屋根には陰陽服を着た男どもが群れをなしていた。対魔師と呼ばれる妖怪の尻を追いかけける有象無象どもだ。その中心に立つ面瘦せた男こそ田原堂馬。稀代の陰陽師であり、天逆を追い続ける対魔師の頭目である。

「天逆。悔い改めよなどとは言わん。

ただ報いを受けて貰うぞ」

「何を抜かすかと思えば。妾は天逆に逆らい理を笑う鬼神じゃ。喰らいたい物を喰らい、犯したい者を犯す。報いを与えたいのならば与えてみよ、三文役者ども！」

天逆が腕を振った瞬間、館の天板が一気に吹き飛んだ。それに巻き込まれ幾人もの対魔師が宙に舞う。

「脆いのう。人とは弱き生き物よ。妖気もなく力もない。せいぜい、妾の手の中で果てておればよいものを！」

雅な着物をはためかせながら華麗な姿が空に舞う。そのまま空を蹴り、天逆は放たれた矢となり堂馬に迫る。

「――な」

天逆の身体は空中で静止していた。いずこからか現れた縄が身体に巻きつき動きを封じたのだ。さらに周囲の陰陽師たちが札を飛ばし、封魔の術を重ねていく。こうなれば大妖怪といえど妖気を外に出すことはできない。

「連れていけ。すぐに術を施す」  
力なく屋根へと落下した天逆に堂馬の指示が飛ぶ。

天逆が連れていかれたのは対魔師たちの本拠の一室であった。館の奥深くに作られたその部屋には天窓一つなく、松明の火が唯一の光源だ。その中心に天逆は転がされていた。着崩れた振袖ごと縄で縛られたその様は陵辱を受け

る女郎そのものだ。だがその顔には余裕の笑みが浮かんでいる。

「妾を捕らえたこと、とりあえずは褒めておこうかの。しかし妾を殺すことなどできぬ。この身は五百年にわたる妖気の結晶よ。対魔師如きが何をしようとしてこの肉体に宿る呪詛が都に溢れ、千年の呪いが降りかかるであろう」

「無論、殺すつもりなど初めからない。貴様のような妖怪にはもつと似合いの末路があるからな」

「ほう？ 堂馬よ、一体何を――」

堂馬が呪言を唱えた瞬間、骨から火が吹き出したような熱さが身を包む。

「お、お主なにを！ ぐうううつ！」

悶える天逆の腹に堂馬の右手が押し付けられた。体内がねじ切れたと思うほどの衝動が下腹部から広がり、足の指先から角の先までを痺れさせる。

「つあ……な、なんじゃ。これは」  
息も絶え絶えに天逆はジンジンと痺れる腹を見る。そこには奇妙な文様が浮かんでいた。強いて言うなら猪目紋様が近いだろうか。

「淫紋、大陸に伝わる房中術を元に俺が練り上げた術だ。その刻印には精気によって邪なる気を払う力がある」

「い、淫紋じやと」  
不穏な響きに天逆は眉を潜める。だがぼんやりと輝き続ける紋様を除けば身体に異常は見受けられない。触れられた際の熱も既に引いている。

「これがなんだというのじゃ？ ただ



のこけおどしか」

堂馬を鼻で笑おうとした瞬間、強烈な臭いが天逆の鼻を打つ。

「な、なんじゃ。このかぐわしい香氣は。青臭いのの身体に沁み込んできおる。欲しい。欲しくて堪らない。妾の気高い鼻腔を惹きつけてやまないこの香り一体？」

「すんすんと鼻を鳴らし、天逆はこの臭いの出所を探る。」

「っ、そ、そんなはずが」

芳香は堂馬の身体から発せられていた。しかも、特に強く香る臭いの中心は袴の股間部である。

「どうした？ そんなに顔を赤らめて」

口元にいやらしい笑みを浮かべながら堂馬が歩み寄ってくる。反射的に身を反らそうとする天逆だが、手足を縛る縄がそれを許さない。

「に、臭いが強く。馬鹿な。妾は何を考えている！ 此奴は敵じゃぞ！」

遂に目の前に堂馬が立った。ごくっ。

思わず生唾を飲んだ天逆。堂馬は焦らすように袴に手を伸ばした。

「ほれ、お待ちかねの物だ」

「あ、ああ……っ」

小使用の開口部から取り出される男性器。まるでそれ自体に吸い込まれるように天逆はそり立つ肉棒を見つめてしまっていた。視線がその形をなぞるたび、じゅんっとう股間に火が灯る。

「これが堂馬の魔羅……な、なんじゃこの気持ちは……く、狂おしい」

大きさはさほどでもない。太さも人並であるし、とりたてて特徴的な形もしていない。まったく面白くない特徴の薄い男性器。だというのに赤黒く脈打つそれから目が離せない。

「な、何故じゃ。一山幾らの棒切れでしかないというのに、初めて男を知った時よりも胸が高鳴りよる。ああ、垂れておるぞ。先走り汁が湯水のように」

「くくっ、天逆よ。貴様の口から垂れているものなんだ？」

「な」

気づけば天逆の口からは熱い蜜が溢れ出してしまっていた。それは口端を越えて顎まで流れ落ち、糸を引いて床まで滴っていた。

「皆も見ろがいい。あの天逆が野良犬のようによだれを垂らしておるぞ」

浴びせるような哄笑が部屋に湧く。天逆は顔を真っ赤にして屈辱の時間に耐えるしかなかった。

「これが欲しいのだろう？ 心を入れ替え、俺専用の雌妖怪として尽くすというのならばくれてやるぞ？」

「ふ、ふざけるなよ人間風情が！ どのような術に妾が屈するか！」

「やれやれと、堂馬はわざとらしい動きで肩を疎めると、天逆に見せつけるように自らの陰部を抜き始めた。」

「な、何をして……ふぐっ！」

手淫右手が鼻と口を覆う。刹那、天逆の意識は快悦の海に沈んだ。

「か、顔中に精臭が広がる！ だ、駄目じゃこれを嗅いで……あ、ああ！」

「いい格好だぞ天逆」

擦り付けられる凝縮された雄の臭い。それにびくびくと天逆は背筋を震わせ、着物の下からとろりと発情の証が垂れ流れ始めていた。

「手淫の臭いで上の口も下の口も垂れ流しになるとはとんだ変態だな。これからその生意気な角ごと妖怪の誇りとやらをへし折ってやろう」

手を離した堂馬の嘲りにすら答えることもできず、天逆は深い深呼吸をくり返す。その下腹部では淫紋が爛々と光り輝いていた。

◆

天逆は縄で縛られたまま天井から吊り下げられていた。両足は踞蹠の姿勢に固定され、腕も後ろ手に縛られて秘所を隠すことも許されない。広がった着物と相まって、今の天逆の姿は受粉を待つ椿の花である。

「ぐっ！ こ、この下郎め！」

「今の今まで惚けていたくせによく吠える。しかし、そちらの口よりもこちらの口のほうが素直のようだな」

淫紋の光に照らされる天逆の股間は、五百年の時など感じさせない見事な美しさであった。

ワインレッドの女性器は肉厚で、まるで淫猥な果実を股間に実らせているように見える。大陰唇もたつぷりと脂が乗り、触れれば綿布団のような弾みで指を受け止めてくれる。そのくせに

入り口は処女さながらの締めつけを保ち、波打った膈壁と細かな髪を持つ膈肌と合わせれば童貞男根なぞ三擦りも待たずに射精させてしまうだろう。

形・柔らかさも処女と熟女の良いところを取り出した究極の熟れ肉壺。天逆の美貌をそのまま映した魅惑の花弁がそこにあつた。

しかし。

「なんだこの色と形は。まるで男を知らぬ未通女ではないか。童子しか狙わぬと思っていたが、青田しか刈れぬ腰抜け穴であつたか」

堂馬の口から出たのは侮蔑の言葉である。それがわざと屈辱を与えているのだと頭では理解できる。だがこの背筋を走るぞくぞくとした官能は一体何事か。

「な、なんじゃこの気持ちは。堂馬に罵倒されこんな気持ちになるなど」

まるで見下されているのが快感であるようではないか。

「ほれ、びしょ濡れではないか」

「はうう！」

ぬちゅっ。

困惑に惚けている隙に堂馬の指が膈口へと押し付けられていた。男根臭で濡れたそこはあつさり指を飲み込み、トロトロと白濁した雌液を絡めていつてしまう。

「あ、ありえぬ。指を入れられただけじゃぞ？ それは何ゆえ……こんなに」

堂馬はまだほんの浅い場所に触れて

165



いるだけだ。だというのに腰はガクガクと震え、覚えがなくなつたと訴えている。

「赤子が乳を吸うように指に吸いついて。もしや俺の指が気に入つたか？」

「だ、誰がそのような汚らわしい、んっ、指など……！ く、食いぢぎられる前に、あつ、抜くことじゃ！」

「その割には随分と嬉しがっているよのだがな。まあいい。指が食いぢぎられるかどうか、少し試してみるか」

「ま、待——んひゃっ」

制止の声など聞こえぬとばかりに、堂馬の抽送が始まつた。

（ま、待つのがじゃ！ 待て待て待て待て！ こ、これはまずい！ たかが指先一つで——んくうううううっ！）

節くれだつた指が肉壁を擦りながら腔奥へと突き込まれる。淫紋によって増幅された性感帯は、わずか一寸足らず指が進むだけで雷に撃たれたような刺激を全身に広がらせてくる。ぎりぎりど封印の縄を軋ませながら快楽に耐える天逆。

しかし、その指を引き抜かれてはもう駄目だつた。腔の官能は入れる時よりも抜き去る時のほうが遥かに大きい。既に生殖を期待して内へ内へと波打っている敏感肉壁を、引つ掻かれながら抜かれなどしたら耐えられないはずがなかつた。

「あ、ああつ！ 削り取られるう！」  
ぬちゅつ、ぬちゅつ、くちゅつ。  
粘つく泡音が部屋中に響き渡る。誰

の耳にも天逆の割れ目が快感に鳴いているのは明らかだつた。着物の裾に隠されていた乳頭も切なそうに膨らみ、物欲しそうに刺激を待っている。

「うっ！ くっつ！ ぐうううっ！」

「それで耐えているつもりか？ 抵抗など無駄だ。その牙の覗く口から情けない嬌声を上げて知れ。お前はもう恐れられる存在ではないのだとな」

堂馬は左手で印を結ぶ。それに呼応するように淫紋が輝きを増すと、天逆の中で快感が大嵐となつて暴れ出した。

「ひっ！ く、来るう！ 来てしまいううっ！ や、やああああああつ！」

堂馬はさらに指を加速させる。腕に残像が残るほどの速度で行われる雌穴責めに、天逆は身体中を痙攣させる。

「無様に、果てろ！」

「はっ、はああああああああつ！」

「ぷしっ！ ぷしゅああああつ！」

身体を反らせ、間欠泉のように天逆の股間から水飛沫が噴き出した。

「女の射精という奴か。くくつ、見ろ。妖怪どもの首領、天逆が腰をくねらせて踊っておるわ」

まさにその通り。天逆は踊りでも踊るように腰を前後に振り乱し、潮を散らしていた。卑猥な腰振り踊りを見せるこの女が、かの大妖怪天逆であるなど誰が信じられようか。

「なんとという間の抜けた顔だ。そこらの路傍に立つ出女いでめのほうがまだ気品があるう。鬼も皮一枚剥げばとんだ淫売種族であつたということだな」

「だ、黙りえ……ぶ、無礼者お……」  
呂律の回らない舌での必死の抗議は、対魔師どもの嘲弄の肴とされた。屈辱に唇を噛むものの、泡立つた唾液の味が惨めさを浮き彫りにしてくる。

「だが、こんなもので惚けていては困るな。貴様には俺の子を産んで貰うのだから」

突然の言葉に天逆の瞬きも止まる。

「幾人もの男を襲つたとはいうが、子を産んだという話は聞かんからな。せつかくだ。貴様には俺に屈服したという証を刻んでやる」

「くひっ！」

べちゃりと粘膜同士が触れ合う感触が広がり、発散したはずの快感が再び湧き戻ってくる。今の今まで忘れていた堂馬の男根。それが秘所に擦りつけられているのだ。そんな愛撫にも満たない刺激が心地よい。絶頂を味わつたばかりだというのにこの甘い刺激だけで再び果ててしまふそうだ。

「……さ、させぬわ！」

「むっ？」

天逆の身体から黒い妖気が溢れ出て下腹部で渦を巻く。そのまま霧と消えたかと思うが淫紋が刻まれたすぐそばでは妖気の気配がまだ漂っている。

「田原堂馬。貴様の胤いんなど我が妖気によつて跳ねのけてくれる！」

縄と境界によつて妖気を外に出すことは封じられていた。しかし体内に術を張ることは可能だ。それを利用して天逆は、自身の子宮口に侵入を阻む呪壁

を形成したのだ。

（これで奴の胤を受けたとしても孕むことはない……それに身体の疼きも抑制することができたようじゃ）

狙っていたわけではないが呪壁は身体を熱を抑える効果も發揮したようだ。幾分覚めた身体に余裕を取り戻し、天逆は堂馬をせせら笑う。

「さあどうする田原堂馬？ その短小でへこへこと腰を振ってみるかえ？」

堂馬は無言で天逆の太ももを掴み、肉棒の先を濡れた肉穴へとあてがつた。「こちらこそな。その減らず口がどこまで続くか愉しみだ、ぞ！」

「っ、ふあああつ！」

「ずっぬううううううっ！」

まったくの遠慮もなしに一直線に肉棒が腔を駆け上った。異物感に苦しみを抱いたのはほんの一瞬で、すぐに焦れた肉穴を埋めてくれる充実感が身体に叩き込まれる。腔収縮によつて淫茎全体を抱きしめればその逞しさに、全身がはじけ飛ぶような快感が天逆の全身を襲う。

（な、なぜじゃ。淫紋の力は抑えておるはず。それとも、抑えてこれじゃと言うのか！）  
少年に騎乗する時の百倍、いや万倍の快感に意識が飛ぶ。それをたつた一突きで味わわされてしまった。

「今の声はなんだ？ まさか、挿れただけで達してしまつたのか？」  
「そ、そんなわけが……ふうっ！」  
「ずりゅっ！ ぶちゅん！ ずぶっ！」



お前がこの  
学園に美食う  
淫魔ね!  
もう逃がさ  
ないわよ!!

退魔拳師  
赤城飛鳥が  
討滅して  
あげる!

凛々しき学園退魔師が  
悪を討つ!

# 退魔拳師 赤城飛鳥

~淫紋に蝕まれた学園~

人間風情が  
調子に乗るな

返り討ちに  
してやる!!





動きは  
封じた!

大口叩くん  
じゃない!!  
ザコ淫魔の  
くせに

アッ

アッ

アッ



淫魔

袂滅

ふふーん

噂ほどじゃ  
なかったわね

お仕事  
完了!

さっさと  
帰...

え?





な...っ  
何よ!?

コシは  
!!



く...  
そっ!

早く見つけ  
ないと



やられた

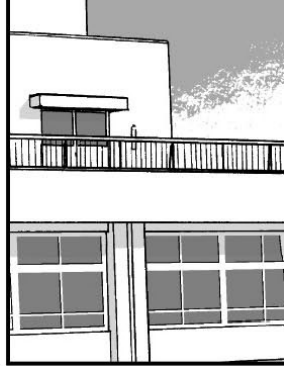
いつの間に  
こんな物...



奴はまだ  
倒せてない



淫魔は業を  
そう簡単には  
変えない



必ず学園に  
潜伏している

仕掛けを

だからこそ  
私に何が



もし...

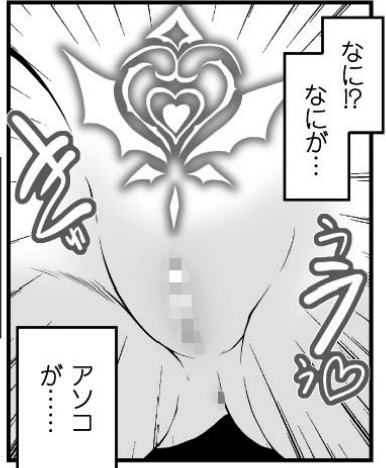


熱...痒...  
疼...くっ♡

ムズムズ...  
どころじゃ

なにがして

ぞん



なにが...  
なにが...

アッコ  
が...





淫紋を刻まれし魔道騎士の運命は  
どうあがいても**絶望**であった……

魔導騎士  
シルヴィナ

墮辱の淫紋

小説 NOVEL かりのけい 狩野景 挿絵 ILLUSTRATION あおぞら 阿呆宮



## 【シーン1】

「うわああつ、魔族の襲撃だ！」  
平穏な町に突然恐怖の悲鳴が轟く。  
「門を突破されたぞっ」  
「うわあ、もうこんな所に!!」  
「衛兵はつ、やられたのか!?!」  
魔族の版図に程近い辺境。守りは強固だったはずなのに、異形の集団はすでに至る所で暴虐を振るっていた。  
「脆弱な人間どもめえ! 女はすべて犯せえ、男は皆殺しだあつ!!」  
「あああつ、いやあつ、やめてえつ」  
「ママあ、痛いよお、助けてえつ」  
家族を守ろうとした男の骸の側で、母と娘が並んでオークの群れに輪姦される。誰もが絶望を抱いたそのとき、  
「サンダー・ブラスト!!」  
空に雷鳴が轟き、灼熱の炎を纏った雷が魔族の群れだけを狙い撃ちした。  
「な、なんだ! 新手か?」  
「あそこだつ! 女つ!?!」  
攻撃に耐えた屈強な一群が色めき立つ。その様を見下ろして、しなやかな肢体に露出度の高い軽鎧を纏う女剣士が、尖塔の屋根に長剣を構えていた。  
「罪もない人たちに悪逆を行う魔族めつ。王国騎士シルヴィナが来たからには、もう好きにはさせないぞつ!」  
大きな瞳に強い光を宿す凛とした美貌。はち切れんばかりの撓わな胸が、急所だけを防護する鎧を押し上げる。尻も胸同様にムッチリと熟れ実っている。

ながら、腰は悩ましく括れている。  
「シルヴィナだど? 魔女の末裔のくせして人間に荷担する恥さらしか!」  
「それにしても、随分といひ身体してるじゃねえか。チンポが疼くぜえ」  
機動力重視の際どい鎧から惜しげもなくさらけ出された魅惑の身体付きに、町の女への陵辱を邪魔された魔族たちが勃起した陰茎を脈打たせ、粘りつく視線を浴びせてくる。  
「気色悪い目を向けるなつ。はっ!」  
ポニーテールにまとめた長い黒髪をためかかせて、シルヴィナと名乗った美少女剣士が宙に舞う。  
「リキッドブレイドツ、せいいつ!!」  
一直線に敵のただ中に急降下し、着地と同時に目の前のトルを斬り伏せる。その刃は高速で循環する水流を纏い、分厚い重鎧ごと敵を分断した。  
「この魔女騎士めがあつ」  
次々と襲いかかってくる竜人たちも、魔法を纏わせた刃が硬い鱗をもものともせず次々と切り裂く。  
「フレイム・ブレットツ!!」  
離れた所から弓で狙うダークエルフに、指先から火炎の弾丸を放つ。  
「くそ、相手は一人だ。取り囲んで一斉に斬りかかれつ」  
「無駄よつ! マデイトラップ!!」  
途端に地面がドロドロに泥濘んで、敵が足を取られ一斉に転倒する。  
「はあああああつ!」  
鮮やかな剣技に刃が翻り、無防備となった敵たちを次々と切り倒す。

「これで全部ね」  
残った敵がいらないのを確認し、剣を鞘に収める。途端に避難していた町の人々が歓声を上げて駆け寄ってきた。  
「シルヴィナ様、助けてくださり、ありがとうございます!」  
「救国の魔導騎士様つ。ああ、シルヴィナ様が来てくださったなんてつ」  
「そんな、みんなを守るのは王国騎士として当然のことだから」  
人々の感謝に照れると、凛とした美貌が人懐っこそうに綻ぶ。  
「それに私が早く来てたら、もつと多くの人が助かったはずだし……」  
襲撃の犠牲となった者たちに祈りを捧げると、人々もそれに倣う。  
「ああ、なんとお優しい……。まるで聖女様のようなだ」  
「魔女の血を引きながら、シルヴィナ様は私たちを救ってください」  
特別な力を正義のために使うのは当たり前なので、余り褒められると照れくさくてたまらない。  
「最近になって魔族の動きが活発になつてきたみたい。町の守りをもつと堅くするように国王陛下に言っておくね」  
笑顔で手を振り、魔族の動きを探るため境界へ赴こうとする。  
かつての人間族と魔族の大戦。シルヴィナはそのときに人々を恐怖へと陥れた、悪しき魔女の血を引く子孫だった。そのため人と関わることを避けて、深い森の中で暮らしていた。だが、また世界に暗雲が立ち込めてくる中、魔

族に蹂躪される人々を見捨てられず、魔法の力で助けてしまった。  
そのときに居合わせた王の求めに応じ、騎士として仕えることになった。最初は魔女の末裔と恐れられていた人々も活躍するに従って受け入れてくれた。  
（平和になったら、今度は人々と一緒に楽しく暮らすんだ!）  
幼い頃の夢を叶えるため、戦いの決意を抱き、町を後にしようとする。  
「戦が終わればお前は用済みだ。魔女として疎まれる日々が始まるぞ」  
その耳元で嘲笑う声があった。  
慌てて身構える。  
「誰だつ!?! くうつ!」  
火炎の弾丸が飛来する。慌てて水流を纏わせた刃で受け止めた。  
「これは、フレイム・ブレット! うわつ、お、お前はつ」  
水蒸気がもうもうと立ち込める中、足元がいきなり泥濘み、慌てて跳んで移動する。自分とまったく同じ魔法攻撃に面食らう。いつの間に入らしたのか広場の中央に、黒いローブに身を包んだ陰鬱な男が立っていた。  
「我が名はゼノフィス。魔王暗黒魔導士。そして伝説の魔女の末裔……」  
「ええつ、お前も魔女の子孫なの?」  
その魔導士の名乗りに、ますます驚いた。魔女の血を引く一族が固まって住まえば人々に警戒されるため、それぞれバラバラに散らばってひっそり人気のない所で暮らすようになった。  
「人々に疎まれた先祖の恨みを蔑ろに

し、人に媚びへつらう一族の恥め。俺が息の根を止めてやるう」

抑揚のない声で告げながら、ゼノフィスの手に強大な魔力が集中する。

「私は先祖とは違うっ。この力をみんなのために役立てたいっ。はああっ」

同時に放たれた雷撃が相殺する。魔法の実力は互角なようだ。

「でも私には剣がある。とりゃあっ」

放電の火花が飛び散る中、魔力の跳躍で一氣に間を詰めて斬りかかった。

しかしゼノフィスに届く寸前で、手足に頑丈な蔓草が絡み付いた。

「くそっ、キャプトアイビーかっ」

樹木系の拘束魔法が身体の自由を奪い、刃の水魔法を吸い尽くす。

「この……、ああ、やめろっ、お前どこを触ってるっ」

ゼノフィスの手が迫った。攻撃かと思つて拘束から逃れようと必死になるが、その指は胸の膨らみを驚掴みにしてきた。

「女だてらに戦場に出るには惜しい身体をしているな。どうだ、降伏して俺の愛妾にならんか？ その熟れた肉体を満足させてやるぞ」

そんな誘いをしながら魔導士は乳房を揉み、肌を愛撫してくる。

「あうっ、だ、誰がそんなものになるかっ。私にベタベタ触るな。そんな所揉むなっばっ、気色悪いっ」

快楽のポイントを探り出し、的確に刺激してくる。だが、快感以上に嫌悪感が強くて鳥肌が立つ。

「ほう、俺の手技に感じないとは、お前、まだ処女なのか？」

反応の鈍さにすぐ察したらしい。

「う……うるさい、そんなのどうだっていいだろっ！ それより私はどうなつてもいいから、町の人たちには手を出すなっ」

言つても無駄とわかつているが、人々だけは命に代えても守りたい。

「我らの一族を忌み嫌つた者たちがそれほど大事か？ ならば奴らに性交の喜びを教えてもらえ」

魔導士が唾いた途端、地面に巨大な魔法陣が広がり、その中から魔族の軍勢が人々に襲いかかる。

「ひあああつ、いやあ、やめてっ、あああ、こんなやあ、助けてシルヴィナ様ああ、ああああ、んはあああッ」

「やめろっ！ うわあッ」

女たちに陰茎を怒張させた怪物たちが襲いかかり、犯し始めた。男たちが助けようとすがすがしく倒される。

「そんな、せつかく救つたのに……」

「だが誰一人として殺してはいないぞ。こうして女どもに最上の喜びを与えてやつていただけだ」

「あんなの、喜びなんかじゃないっ」

並外れた大きさをした異形のペニスを無理やり突き込まれて、女たちは恐怖に嘆きながら続けざまに絶頂する。

（あ、あんなものを、股の間に入れるのか!?）

早く助けなくちゃと思いつながら、

初めて見る男女の交わりから目が離せなくなる。

「どうやら興味が湧いたようだな。どれほど拒んでも、男根を突き込まれれば耐え難い快感に溺れて達してしまふ女の身体はそのようにできているのだ。その甘美を知りたければ俺の逸物で味わせてやるう」

目の前の惨劇を呆然と見つめるシルヴィナの眼前に、ゼノフィスが隆々と勃起したペニスを突き付けた。

「へ、変なもの見せるな。私はそんな快感なんか知りたくない。みんなにももうこれ以上、酷いことするなっ！」

赤黒く太った矢尻型の肉棒は、驚くほど大きく、幾本もの筋を浮き上がらせて絶え間なく脈打っている。

「ほほ真上にそそり勃つたその先端から、濃密な汁を溢れさせてぬめる。禍々しさと不潔さに満ちたその逸物に本能的な嫌悪を覚えながらも、なぜか目が離せない。それを悟られないように声を荒らげて拒絶する。」

「そうか？ お前がこれを受け入れるなら、町の者たちは見逃そうと思つたのだが仕方ない。お前の純潔と引き替えに、この町の女すべてを、俺の性奴隷へと貶めてやるう」

人々への強い思いを知ると、ゼノフィスはそれを餌に無理を迫る。

「く……、卑怯者。わ、わかつた。私を好きにしろっ。その代わり、みんなへの仕打ちを今すぐやめろっ」

「物わかりがよくて何よりだ。それで

は私の逸物で、女の喜びを存分に知ってもらおう」

ゼノフィスが合図を送ると、魔物たちは一斉に陵辱を止めた。それと同時に屹立した陰茎が股間に迫る。

（く……うう、気持ち悪い。あんなものを、私の……中に？ でも、みんなを助けるためだから、我慢しないと身を寄せてくるゼノフィスから男臭い体臭がムンと漂ってくる。

身体を執拗にまさぐり続けられ、嫌悪感の中に奇妙な熱が芽生えてきた。その最中に、下穿きが押し退けられて股間が露わにされる。

「ふあうっ！ ああ、そんなところについて。くううっ!!」

まだ誰の侵入も許していない秘花弁が押し広げられる。

（な……に、いまの？ ゼノフィスのが、触れた途端……ああ）

粘膜の割れ目に肉鏃がめり込んで小さな穴を探り当てた途端、初めて味わう衝撃が走った。

気持ちいいとしか表せない、未知の刺激に戸惑う。

「ふん、処女らしく頑なに窄まってるな。だがすぐにお前の方から俺のものにせがむようになる」

「く……ッ。身体はお前の好きにさせてやるけれど、私は絶対にそんなことしない。犯すなら早く犯せっ」

乳房を捏ねられ、生肌を擦るよう指を這わされる度に、危険な疼きが膨れ上がってきている。一層頑なに心を



引き締めると、膣口もますます窄ま  
つて魔導士の肉竿を拒む。

「ふん、無駄な抵抗を」

鼻で笑いながらゼノフィスは、硬く  
充血した先端で穴口をグリグリと穿つ  
て綻ばせようとしてくる。

「くうっ、はう、ぬう、ううう……  
どうした、とつとと入れないのか？

私を快楽の虜にするんだらう」

初体験はかなりの痛みを伴うと聞い  
たことがある。それならば焦って無理  
矢理に挿入してくれば、その激痛で嫌  
悪を高められる。悩ましい疼きを堪え  
て、ゼノフィスを挑発した。

「くくく、無駄な強がり」

そんなシルヴィナを嘲笑いながら魔  
導士は愛撫の執拗さを増してきた。

緩急織り交ぜた指遣いに乳首を刺激  
され、撓むな房を上げられると、熱い  
刺激が続げざまに走る。陰茎は膣口を  
穿るだけでなく、割れ目の粘膜を擦り  
立てて甘美な脱力感をもたらす。

「う、ん……、どうした、下手くそ。

全然気持ちよくなんか、ならないぞ」

しかし経験のなさが、そんな快感も  
未知への恐怖となつてシルヴィナを頑  
なにさせた。

「なるほど、確かに一筋縄ではいかな  
いようだな。それならば受け入れやす  
いように身体を解きほぐしてやろう」

焦れるかと思つたのに魔導士の余裕  
は変わらない。いったん身を退くと、  
術式を唱えながらシルヴィナの腹部に  
掌を押し当ててくる。

「魔法!? なんなの、それ!」

同じ祖先を持ち、同じ魔法を使うと  
いうのに、聞いたこともない呪文に不  
安を覚える。その途端、シルヴィナの  
腹部に奇妙な紋様が刻まれた。

「どうやらお前の家系には伝えられて  
いないようだな。おそらく禁呪として  
封印したのだから。愚かなことだ」

「禁呪!? く……う、あああ、これ

なにか変、ああああ。身体が熱い。  
力が、はあ、ああああ、抜けるう……」

ゼノフィスの指が印を結ぶと紋様が  
怪しい光を放ち、熱い疼きがシルヴィ  
ナの下部を襲う。熱帯びた下腹の奥  
がドクンと大きく脈打ち、股間に熱い  
ヌメリがじゅわんと溢れる。

「そうだ、我らの先祖が世界を混沌へ  
と導いた暗黒魔導の一つ。淫紋を刻ま  
れた者の情欲を極限まで高め、性の奴  
隸へと貶める秘術、淫紋術だ」

「淫紋術……。そんなおぞましい魔法  
を、あああ、よくも私に」

もはや拘束は不要と、魔法の蔓が解  
かれる。萎えた足が身体を支えられず、  
へたり込んでしまった。

「ふあああ。なんで……、ああ……」

股間から、ぷしゅーと失禁のように

牝臭い汁が溢れかえる。

「これだけ身体が蕩ければ、心もすぐ

快楽に馴染むだろう。さあ、約束どお  
り俺を受け入れてもらおうぞ」

隆々と怒張をそそり勃たせてゼノフ

ィスが再び迫ってきた。

「く……ああ、寄るなあ。こつちくる

な、この……おお、触るな、ふあああ  
あつ、やめ、あ、あああ、そんな強く  
触つたらあああああつ」

近づく魔導士から逃れようとするが  
腰に力がまつたく入らない。さらに触  
れられた途端、息が止まるような甘美  
に全身が満たされた。

「やめろお、放せ……あああつ、変な  
もの、そんなとこに、近づけるな……  
ああ、はあああ、やめ、んはつ」

肩を軽く引き寄せられ、あつさり従  
つてしまう。抗う気持ちを奮い立たせ  
ようとすが、先程とは比べものにな  
らない甘美に呆気なく霧散する。

「近づけるなどいっても、迎えてくれ  
ているではないか」

いわれて確かめると、魔導士の陰茎  
に向けて、自分から浮かせた腰をどう  
ぞとばかりに突き出していた。

「ふえっ? はああ嘘おおつ、これ違  
うつ。私こんなこと、あああ、なんで  
っ!? 身体がいうこと聞かないつ」

慌てて戻そうとしても身体が欲求に  
従つて勝手に動く。

「求められたなら応じなくては礼を失  
するな。さあ味わつてくれシルヴィナ、  
我が逸物を!」

幹がまたむくりと一回り膨張した気  
がする。その切っ先が愛液で泥濘んだ

女騎士の股間へ狙いを定めた。

「あああつ、応じなくていいからつ。い  
らないそれつ、だめつ、来るなつ、あ  
ああああつ、んはあつ!!」

魔導士の手が鎧を下着ごと強引に引

き剥がす。発情に割れ綻んだ女陰が露  
わになり、ムンと甘酸っぱい牝臭を立  
ちのぼらせる。

その奥で忙しく開閉を繰り返す小  
さな口に、亀頭の先がめり込んだ。

「ひあああつ、いやつ、おあ、あ、あ  
あああつ、だ……め、なのにい、あ  
ああああつ、これ、あ、ううつ」

ヌメリに導かれてぬつぷりと太い感  
触が鋭敏な穴に埋まり込んでくる。

絶体絶命の危機なのに、ゾクゾクと  
渴望が癒されるような多幸感が脳裏を  
犯してくる。

「だ……め、こんなのに、負けちゃ  
あああつ、ひぐつ、あがあつ」

快楽に流されまいと気を引き締める  
が、途端に重い痛みが襲い来る。

「あああ、それ以上……だめえ、やめ  
……て、うぐう、ああああ、はあつ」

純潔の危機に怯えた刹那、  
「くあああああつ、痛あああああつ!」

陰茎が処女膜を突き破つた。

「あああつ、そんなつ、私の初めてが  
あ、こんなことで、こんな奴に」

発情の淫紋を刻まれ、否応もなく男  
根を突き込まれた惨めな初体験に、悲  
しみと痛みが身も心も苛む。

「男も知らぬ無様な境遇から解き放つ  
てやったのだ、ありがたく思え」

まるで救つてやったかのような魔導  
士の物言いが追い打ちをかける。

「誰がありがたくなんか、あ、あああ  
つ、やめ、あああああつ、まだ奥ツ、入  
つて……く、ああああつ、だめえつ。そ

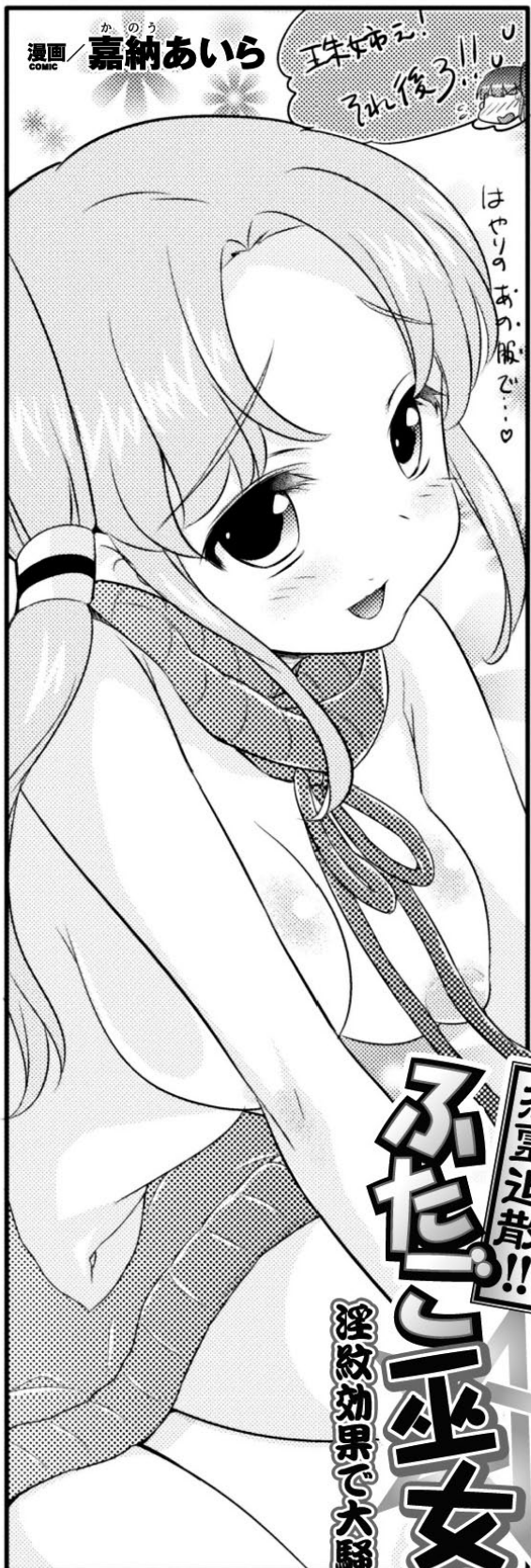
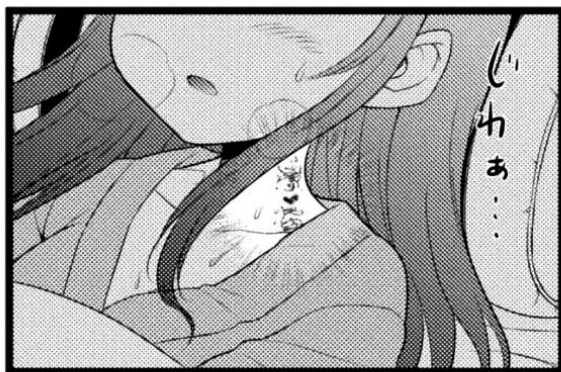




浮かび上がる謎の…



ある日の深夜



漫画 かのう 嘉納あいら

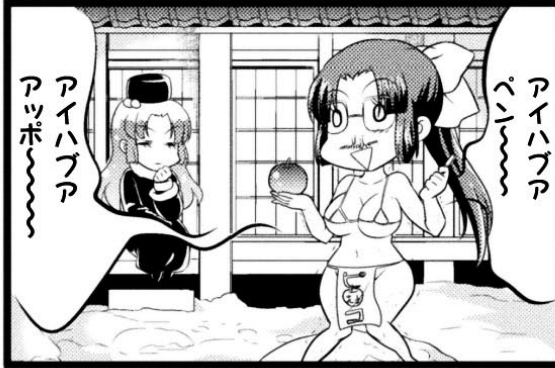
王女様よ!  
その後3!!

ハアハアハア……

★淫らになるマイテムは淫紋だけでは限らない?★

怨霊退散!!  
**ふたごの巫女**  
淫紋効果で大騒動!!  
十巻

# 常に鳥肌



**如月珠音**  
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。

アイハブア  
アイハブア  
アッポ~~~~

# いつもの朝?



翌朝

**姉 珠音**

今日は  
炊きたてご飯で  
特大おむすびよ♡



**如月鈴音**  
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



…あら?  
**鈴音**…さん…?



…おはよう…  
珠姉え…

**鈴ちゃん!**  
どうしたの?  
そのカツコ…!



**真中**  
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。



こんな雪の中…  
どうみてもおかしい…

催眠とけた

あんな薄着で…  
あー!!  
また女中上ー!!



な〜にがー!?  
何もおかしくないよお〜?

…いや  
いろいろおかしいわよ  
**鈴ちゃん**…



あのね  
**姉上**…

裸

犯人

追いかけて

いくらなんでもこんな雪の中裸一丁でいるなんて正気の沙汰じゃないわ…!



ちよっとお〜  
ガッコいってくつからあ〜

それで…!?

漂う妖臭…

ぞわ〜ん  
わんわん



肉悦に堕ちる清き魂

# シスターミアム

ものう うきよう  
小説 / 桃生雨京  
NOVEL

挿絵 / ねむ  
ILLUSTRATION

貞淑なシスターに刻むは  
抗わざるマゾ牝の印



# シスターミリアム

肉悦に堕ちる清き魂

「人に害なす邪なる者よ、神の御名と御力において、一切の塵なく現世から消えよ！ スデウ……ミネーノ……デ——」

見習いのシスター、ミリアム・マンフィールドは悪魔祓いの枕詞を唱え、次に呪文を口にした。修道服に包まれた十五歳にしては豊かな髪が淡いオレンジの光に包まれる。不思議な風が發生し、ミディアムロングの金髪ストリートヘアが靡く。

「ディ……ロウス……ザビユース！」  
鋭く叫び、右手を前へと掲げる。ミリアムの碧眼が映すのは地面に伏した一人のサキユバス。男の獣欲を刺激し、精を搾り尽くす淫魔だ。

「きゃっつ！ ううつ、ヤッ……ああああああッ……!!」

ミリアムを包んでいた光がサキユバスへと飛ぶ。劈くような悲鳴が響く。淫魔は肉感的な肢体をふるわせ、ピンク色のツインテールを振り乱し、跡形もなく消え去った。

(……お、終わった？ わたし、ちゃんと……できたのかな？)  
不安になってあたりを見回す。ここは村はずれの廃屋。視界に入るのは朽ちた木の壁、床、割れたガラス窓、そして月光が差しこむ穴の開いた屋根だ。ピキニのような服、二本の角や尻尾はもう見あたらない。

「ふふっ、ミミったらなあにオドオドしてるのよ。はじめての悪魔祓い、大成功したんだから、もつとしゃんとな

さい！」

背後から軽やかな声が聞こえた。振り返るとそこには先輩のシスター、アモーネが立っていた。身長百七十センチのスレンダーな身だが、でているところははしつかりとでている。腰まで伸びるウェーブヘアは黒色で、切れ長の目の色も黒。それが彼女にどこかミステリアスな雰囲気を与えていた。

「本当？ 本当にわたし……わふっ！」  
ミリアムの顔がアモーネの乳の間に埋まった。そのやわらかな感触とどこか甘ったるいにおいに、張り詰めていた心が和らいでいく。

「お姉さんがミミに嘘をついたことある？ 本当によくやったわ。私たちの教会にきて三年……これで、一人前ね」  
「アン……あ、ありがとうっ！」  
顔をあげると慈愛に満ちた笑みがあった。涙腺がいつきに緩む。

「あああ、こんなことで泣いちゃうなんて。前言撤回……しちゃうかな？」  
「な、泣いてないっ……全然っ、泣いてないよおっ！」  
慌てて目を拭い、意地悪シスターにふくれっ面を向ける。

「いや、その必要はない。よくやったぞ……ミリアム」  
「あっ……！ し、神父さまっ！」  
厳めしい声を耳にして、ミリアムはさつとアモーネから離れ、背筋を正した。現れたのは黒衣を纏った神父、クライヴ・D・マクベスだった。歳は五十六、身長は百八十センチを超え、

灰色の髪をオールバックにしている。瞳の色は深い緑色だ。

「聖水を撒き、悪魔の逃げ場を封じる手際、祓い詞までの立ちまわり……充分、及第点だ。ただ、呪文の詠唱がやや拙いな。そこを注意すれば今後、ミリアム一人に現場を任せられるだろう」  
言葉を切ったクライヴが、ほんの僅かだが微笑んだ。

褒めの言葉と神父の珍しい笑みに、見習いシスターは感激した。

「わたし、がんばりますっ！ 人のため世のため……いっそう励みます！」  
声を張って返事をする。胸の前で両手を組み、その場で軽く膝を曲げた。

「この場の片付けは私とアモーネがやっておこう。ミリアムは教会に帰り、今日はもう休みなさい」  
「はい。ありがとうございます」  
「ふふっ、お姉ちゃんがいなくても、ちゃんと帰れるかなー？」  
「も……もうっ！ アンったら！ わたし、もう子供じゃないんだよっ！」  
またからかってきたアモーネだったが、やさしい手つきで綿製の肩掛けを羽織らせてくれた。ミリアムは照れ顔で「ありがとう」と返す。

「それでは、お先に失礼いたします」  
二人に礼をして、廃屋を後にした。

(ふわあ……寒い)

季節は冬だ。吐く息は白く染まり、星空瞬く空へとあがっていく。肩掛けを首元へ寄せ、野道を駆けだした。ここから教会まで一キロもない。十分足

らずで到着するだろう。

(……一人前かあ、ふふっ。うれしいな。これでわたし……もつと、もおつと！ 人の役に立てるんだ！)

ミリアムはこの村から数十キロ以上離れた大きな街で貴族の娘として生まれた。なに不自由なく豊かな暮らしを送っていたが、十二歳のときに転機が訪れた。クライヴとアモーネが街へ説教にやってきたのだ。

(神父さまとアンに出会わなかったら……わたし、ずっと偽りのしあわせの中にいたんだ)

王政の腐敗、貴族と商人の利権構造、それに伴う地方の町や村の疲弊、そして、悪魔族の跋扈。世の真実を知った少女は己の不勉強を恥じ、貴族という身分に嫌悪感を抱いた。最終的にいきついたのは弱き人々の役に立ちたいという強い使命感。家を捨て、教会の門を叩き、クライヴとアモーネの下で見習いシスターとなったのだ。

(悪魔と戦えるようになったんだ。これからもつと努力して、たくさんの人を救えるようにならなくちゃ！)

教会に着いた。石造りの二階建てで、一階が礼拝堂、二階が居住区になっている。階段は建物裏の屋外にあり、そこからへとまわった。

「おかえり、ミリアム」  
階段の裏から青年がでてきた。村に住む農家の息子、セシルだ。歳は十八。背はミリアムの頭ひとつ分高い。淡い色の茶髪はやや長めで黒い眉にかかっ



ている。はにかんだ笑みを浮かべて、こちらに寄ってきた。

「セシルっ！ ど……どうしたの、こんな時間に。ずっとここで待ってたの？ 寒かったでしょう」

思いもよらなかつた人物の登場に、当然ミリアムは驚いた。だがそれ以上にうれい。顔の頬が緩み、胸が高鳴っていく。

「やだ……わたし、髪とか顔、汚れないかな？ それに……においも。さっきの戦いで汗もかいちゃってるし」羞恥心でセシルの焦げ茶の瞳を見られなくなつた。

「ははっ、全然平気だつたよ。ミリアム……きみのことを考えてたら胸があたたかくなるからね」

「セシル……あつ」

両手をやさしく握られた。彼の体温で清純な少女の鼓動はさらにはやくなる。二人の顔の距離も縮まつた。ミリアムの視界にはもう愛しい人しか映っていない。

「今日、試験だつたんでしよう、悪魔祓いの。だいじょうぶだつた？」

「うん……平気だつた。アンにも……神父さまにも、合格をもらつたよ」

「そう……それならよかつた」

「……もしかして、それが気になつて待つてくれたの？」

大きな頷きが返ってきた。青年がこちらをまっすぐに見て、口を開く。

「当たり前だよ。ぼくの大事な人が危険な目にあうかもしれないんだ。心配

で心配で……家でじっとしていられたかつたよ」

その言葉と視線にセシルの深い愛情がこもつていた。ミリアムは細い肩をふるわせて熱い吐息をこぼす。

「ああ……セシル、ありがとう」

双眸から涙が溢れだす。濡れた瞳で彼をじつと見つめた。

「ミリアム……そんな顔をされたら、ぼくっ……！」

男の手が少女の肩へと移つた。セシルが目を閉じ、乾いた唇をこちらへ寄せてくる。

「セシル……だ、ダメえっ！」

口唇が交わる間際、青年を突き飛ばした。ふるえる朱唇を両手で覆い、掠れた声をこぼす。

「ごめんさい、セシル。あなたの気持ちにはうれいし……わたしもあなたと同じ気持ちよ。でも……でもねっ、わたしはシスターなの。あなたとこれ以上進んだら、わたしはわたしで……いられなくなる……！」

一瞬、セシルが絶望の表情を浮かべた。だがすぐに弱々しく微笑んだ。

「そう……だよ。ごめんっ！ ぼくつてばきみの立場を考えずに突っ走っちゃつて……。今日はもう帰るよ。それじゃあね、ミリアム。また明日」

「あつ！ セシルっ……！」

とめる間もなく、セシルは走り去つてしまった。その場に残つたミリアムは自分の手を握りなおす。まだ彼の体温が残っているように感じた。

「ごめんさい、セシル。本当はわたし……わたしだつて、あなたと——」

ミリアムはそこで考えるのをやめた。シスターとして許されない領域に入つてしまふ。

「あ……雪」

鼻の頭に冷たいものがふれた。いつの間にか空は雲で覆われており、無数の雪が舞つている。ミリアムは長いため息を漏らし、もう一度セシルが去つた方を見た。そして、階段をゆっくりとあがつていく。

「おやすみ……セシル」

もう届かない声をこぼし、教会の中へと入つた。

「えっ……!! う、嘘っ……!?!」

深夜、ミリアムは躰が火照つて寝つけないかつた。水浴びをしようとベッドから抜けだし、井戸へ向かつていた。

（神父さまっ?! アン……村の人たちもっ！ それに……わたしが倒したはずの……サキュバスまでっ!）

そこは教会の裏庭にある物置小屋だ。中は数本の蠟燭で照らされている。裸体のクライヴ、乳や尻を露出したアモーネ、全裸姿の男村人が二人、そしてピンク髪が目立つサキュバスがいた。

全員蒸気のような表情を浮かべ、低いうめき声を漏らしている。女二人は藁を敷いた地面へ四つん這いになっており、その周りを男たちが囲つていた。

（どうして……どうしてっ?! 神父さまっ、アンまでっ! 神父さまに仕える

神聖な躰なのにっ!）

振り返つたクライヴのペニス、濡れそぼるアモーネの肉壺の中に入り、激しく前後している。村人たちもいきり勃つた肉棒を、サキュバスの口やヴァギナに突っこんでいる。

「あんっ……んっ! クライヴつたら……ふふっ、いつもより激しいじゃないか。ミミが一人前になつたのがうれしいのかしらっ……きやうんっ!」

パンツと肉同士のぶつかる音が響く。アモーネが甲高い声を漏らして首を反らした。流麗な黒髪が広がり、汗の雫が飛び散る。

「んうっつ! そんなにされたら本性……でちゃうわっ! あつ、あああッ……!」

妖艶なシスターの全身が紫色の光に包まれた。彼女の着ていた修道服が消え、胸元が大きく開いた漆黒のドレスに変わる。黒の髪はキラキラと輝く銀髪に、瞳は燃えるような真つ赤な色となつた。最後の仕上げとばかりに、頭からは二本の角が、臀部のやや上からは尻尾が生えた。

「……や、やだ。うそ……だよ。アンが……悪魔だつたなんて。信じない……信じられないよっ!」

恐怖が驚愕か、ミリアムの躰はガクガクとふるえていた。息は過呼吸のように乱れている。この場から逃げだしたい気持ちで湧いてきた。しかし、そうしたところでなんの解決にもならないことはわかつている。

(しつかりしなくちゃ……! きつと、あのサキユバスか他の悪魔に取り憑かれてるだけ! 神父さまもアンも、村の皆も操られてるだけ! わたしがしなくちゃ! 今、戦えるのは……わたしだけなんだからっ!)

見習いのシスターはその場に背を伸ばして立った。脚は相変わらずふるえているが構っていられない。ドアに手を置いて、深呼吸をした。

(神さま、そしてセシル……! わたしに勇気をつ……!)

「そこまでよっ! サキユバス……それにアンに憑いている悪魔っ、覚悟しなさいっ!」

ドアを破らんばかりの勢いで小屋の中に突入した。仁王立ちし、サキユバスを睥睨する。

(うっ! ひ、ひどいにおい……!) はじめて嗅ぐ生臭い臭気が少女の鼻に入ってくる。胸の奥が一瞬、妖しくざわめいたが気づかないふりをした。

「あらあ、ミミ。うふふっ、とうとう……バレちゃったわね」

アモーネが余裕たつぷりの笑みを浮かべ、その場に立ちあがった。クライヴとの接合が解ける。赤黒く怒張した男根が現れ、やや濁ったカウパーが彼女の股座から伝った。

「あなたが十六歳になるまでは待ってあげようと思ってたんだけど。まあ……ちようどいいタイミングかしら」

「わけのわからないことをいわないでっ! 卑怯な悪魔めっ! 今すぐっ、

アンの中からでていきなさいっ!」

「んふっ、あたしはあたしよ……ミミ。あなたのお姉さん、あなたが大好きなアン……それだけよ」

「言葉が通じないようねっ! ならっ、問答無用で祓うだけよっ!」

ミアムは地を蹴った。修道服の懷から聖水の入ったガラス瓶を取りだす。微笑するアモーネ目掛けて、全力で放った。小屋の中にパリンッと瓶が割れる音が響く。

「なッ!? えっ……魔法障壁っ!」

聖水は目標に届いていなかった。彼女の前に半径五十センチ大の魔法陣が展開している。それがガラス瓶を弾いたようだ。

(そんなっ! 魔法ならまだしも……物理攻撃を障壁で? それもたつた一枚でっ? いったいどれほどの密度が……) きゃっ!)

油断だった。ミアムはサキユバスに後ろから羽交い締めになされた。淫魔特有の濃厚な牝フェロモンが鼻腔を満たす。背中には張りのよい乳房が押しつけられた。彼女が耳元で囁いてくる。

「彼我の差はわかったようね。フフッ、でももう遅いわ。悪魔が教会の敷地内で平然としているのよ? その時点で察しないと。あなたがすべきだったのは突貫じゃなくて、応援を呼ぶことだったわねん」

「くっ……離しなさいっ! あなたはさつき、わたしが祓つたはずなのに!」

「なめてもらつっちゃ困るわ。演技にき

まつてるじゃない。アモーネお姉さまに頼まれたの。自信をつけさせてあげなさいって。フフッ、大事にされてるわね、あなた。妬けちやうわあ」

「ウソっ! あ、アンっ……! ウソっ! ねえっ、アモーネっ!」

懸命な声をアモーネへ飛ばす。返ってきたのは否定の語ではなかった。

「ごめんなさいね、ミミ。今のあなたの顔、とっても可愛くてゾクゾクしちゃう。うふふっ! ふふっ、ふふふははははッ!」

ミアムの絶望が心底愉快ならしく、アモーネは高らかに晒した。否、それはむしろ暴力に近かった。耳に突き刺さる高い声が、清い少女の心を削っていく。

(……間違いない。アモーネは悪魔なんだ。そんな……わたしと……彼女に騙されていたの? じゃあ、神父さまは……?)

一縷の希望があるとしたらクライヴだった。彼はまだこちら側かもしれないのだ。悪魔がかけたであろう催眠魔法を解かねばならない。小屋の奥に立つ神父を捉え、口を開いた。

「人に害なす邪なる者よ、神の御名と……ひっ!? やっ……! ど、どこさわってっ……あんッ!」

口から嬌声がこぼれる。サキユバスの手が修道服の間から入り、穢れのない豊乳を直に揉んできた。抵抗しようとしたが、拘束魔法を使われたようだ。

両腕が頭の上からまったく動かない。

「あなた本当に十五歳なお? サキユバスのわたしより、おっぱい……大きいじゃない、フフッ」

サイズと形をたしかめるように淫魔の両手が双乳を這う。

「離しなさいよ……ンッ! 汚い手で……ふれないでっ、んうっ!」

「ンフフッ、感度も悪くないみたいね。先つぽがもう硬くなってるわん」

サキユバスの親指と人差し指がミアムの乳首へと移る。最初はくすぐるような甘いタッチだったが、徐々に激しくなってきた。

「こんなにピンピンになつてえ。シスターのくせに、恥ずかしくないのお?」

「ちがつ……んうっ、あなたの魔法のせいよっ! わたしがこんな……あ、ンッ! やっ、声が……うううっ!」

両の乳頭を摘まれ、小刻みに扱かれる。パストの先端から全体へ痺れるような感覚が広がっていく。

(恥が勝手に動いちゃうっ! 恥ずかしいのに! したく……ないのにつ!) 自慰の経験もない処女がはじめて味わう性悦だった。自分の肢体が自分のものではないように感じ、ひどく戸惑った。

「あんまりイジメちゃダメよお? ミミは本当に初心なんだから……ふふっ」

アモーネは木椅子に膝を組んで座り、ミアムを視姦していた。恍惚の表情を浮かべ、両サイドに立つ村人のペニスをゆつくりと扱っている。



「はい、お姉さま。それじゃあ……フフッ、軽くイタズラするだけにしておきましょうか……ちよつと頭の中を覗かせてねん」

「えっ!? やつ……な、なにをするのっ? あっ……あああッ!」

サキユバスの尻尾がミリアムの額にやつてきた。紫色の光が灯り、掌サイズの魔法陣が発現する。その直後、脳裏にセシルの姿がはつきりと浮かんだ。「ふむふむ……なるほどなるほどお。そのかわゆい男の子は、セシルっていうのねえ。シスターちゃんとラブラブなんだあ。ちよつと前に……あらあ、手を繋いで、キス——はしないのね。シスターの鑑だねん。そしてしてえ……? フフッ、ウフフフフッ……!」

魔法陣と紫の光が消え、額から尻尾が離れた。発熱時のように顔全体が上気している。微かにふるえる声で淫魔に質した。

「今、わたしに、なにを……したの?」

「フフフ……! 別になにもお? それよりお姉さまあ。わたし、ちよつと席を外してもいいですかあ?」

「意地が悪い子。ふふ、好きになさい」

「お姉さまには負けますわ。それじゃあ……失礼しまあす!」

二人の悪魔族が意味ありげな笑みを交わす。サキユバスは背から蝙蝠のような羽を生やし、小屋の外へと飛んでいってしまった。

「待……てっ! ううッ、まだっ……拘束魔法がっ……!」

ミリアムは彼女を追おうとしたが、牀の自由がきかなかつた。両腕は未だに吊るされたような状態で固まっている。

「さて、と……ようやく落ち着いて話ができそうね。ふふふっ、お姉さんに訊きたいこと、なにかあるかしら?」

アモーネがゆつくりと寄つてきた。アンティークを愛でるような手つきで顎を撫でられる。背中にゾクゾクとしたものが走り、それを消す意気で大声を放った。

「わたしを殺すなら殺しなさい! だけどっ、神父さまや村の皆は——ンッ!? むうっ、んううッ……!!」

ミリアムの唇に悪魔の舌が飛びこんでくる。ジュルッ、チュパッ、ジュルルンッ。唾内の唾液を激しく吸われ、彼女の熱くねっとりとした涎を流しこまれた。

（キスっ……!? イヤあつ! はじめてなのにつ! 女同士でっ、しかもつ悪魔となつてっ! ンううッ!）

蕩けるような舌肉が唾内を這いずりまわる。初心なはずの牀が、僅かだが快美を得てしまう。無意識のうちに汗ばんだ太ももを擦りあわせていた。

「ふわあ、はあ……ン、甘露ねえ。ミミのお口は極上のワインにも勝るわ」

茹だつたような顔でアモーネが微笑む。口の端を指で拭い、チュパッと音を立てて少女の口腔汁を吸いあげた。

「ふふっ、殺すなんて馬鹿なこといわないで。これからが本番……三年待つ

たメインディッシュなのよ」

もう一度、悪魔は自分の指にキスをする。爪が急激に伸び、鋭利なナイフのようになった。それをミリアムの修道服の胸元にあてがい、いっきに引きおろした。布が裂ける音と、ミリアムの悲鳴がユニゾンする。

パールを思わせる白い肌が露わになった。汗でしっとり濡れ、火照っている。清貧な生活を送っているというのに少女の双乳はたわわに実り、乳首は重力に逆らつてツンと上を向いている。純白のショーツもビショビショになつていた。女子の恥ずかしいクレパスに深く食いこんでいる。

「はあ……ン、きれいよミミ……うふふっ。さあ……清浄な世界にお別れをいってね」

妖しい笑みを浮かべ、アモーネは右手を掲げた。手の甲に複雑な魔法陣が展開し、紫色の光が五指を包む。

「な、なにをするつもりなの! わたし、負けないわよっ! 絶対っ、負け——ひッ! ああああッ……!!」

へその下に掌が押しつけられた。火にかけた薬缶のように熱く、ミリアムは甲高い悲鳴を漏らす。しかし痛みを感じたのは一瞬だった。

（どうしてっ……!? これっ、だんだんっ、き……気持ちよくな……!）

下腹部に甘美な愉悅が生まれ、それが神経を渡るように全身へと広がっていった。口から溢れる声が淫靡な響きを帯びていく。

「ああッ、なにつ!? なにかっ、きちやうっ! やつ、ヤダああッ!!」

プシヤアッと牝の蜜がショーツの中ですべいた。タイミングを見計らつたかのように拘束魔法が解け、ミリアムは地面にへたりこむ。

（わたしっ、お漏らしを——えッ!?）

失禁したのかと思ひ、涙で濡れた瞳を下肢へと向ける。そのとき、へその下に奇妙な紋様があることに気づく。濃い紫色で蝶が羽ばたいているような形だった。

「お気に召したかしら、ふふっ。お姉さんから大好きなミミへ、とびつきりのプレゼントよ。さあ……あなたたち。ミミにオトナの世界を教えてあげて」

アモーネの言葉を合図に二人の村人が進みでて、地面に伏すミリアムの前へ並んだ。彼らの正体に気づいた少女は驚きの声を漏らす。

「ブルーノさんっ! それに……ウソっ! デレックさん……!」

「うひひっ! まさかミリアムの嬢ちゃんやれる日がくるとはなあ!」

下品な言葉を口にしたのは、村の外れに住む独身の中年ブルーノだ。働きもせず、昼間から酒ばかり飲んでる。ミリアムにぎらついた目を向け、太鼓腹の中央で反り勃つている。ペニスを見せつけるように扱っていた。

「……ミリアムちゃん。息子がいつも……世話になつてるね」

対するデレックは勤勉でリーダー性があり、村の誰からも尊敬されている。

体に印を描く…その魔法は  
術者の思いを具現化する

勝利・平和・愛  
言霊を印に変え  
戦い続けた

自らの体に印を描き  
戦う少女……!

私は魔女「叶依」  
百年以上の時を生き  
力をふるった

正義を信じる人を  
信じその助けとなり  
常に勝利へと導いた…

しかしこの印も  
大戦争の力の渦には及ばず  
多くの死を見た

次は…きつと…

淫らな印の  
インモータル



とはいえ戦ばかり  
常に起る訳ではなく…  
普段は占い師として  
人々を導いてきた



となりの  
吾助の事が…

ふむ…  
良縁とでたぞよ



亭主が浮気して  
ないか心配で…

カードは否と  
でています

多くは恋の悩み…  
いつの世も女性には  
変わらないようで…



水晶には  
吉とでました

ん…じゃあ  
勇気ださなきや

色々な占術をするけど  
最後は印を描き  
背中を押すだけ…



さあこれで大丈夫

全てが上手く  
いきますから…

彼女達の思い願いが  
形になるように…

そうして長い年月が  
流れ時は現代

人々が戦いを忘れ  
笑顔あふれる世界

それでも人は悩み…  
求め続けている





他人に見られながら  
してみたんですっ♡

野外プレイとかっ  
AVとかでも♡



だから援交だよ  
金持ちのオヤジとさあ

一発でたんまりだぜー？  
それが理想じゃんっ！



ボロボロに  
なりたいの…

肉便器にされたいんです  
乱暴にゴミみたいに…



とりあえず  
恋愛相談で…  
いいのよね？

これで  
大丈夫ですよ

おっ！なんか  
ききそーじゃんっ



どうしよう…  
意味がわからない

にくべんきって  
なに…？

え…と…

それは  
お困りですね…



ごっごめんさいっ

外じゃないっ！  
レイプ…

最近の言葉は  
難しいです…

おいっ全然オヤジ  
よってこねーぞっ！！





意味を調べるのは  
後にして…

時間も  
かかりますし



れいぶ…

せふれ…

やがいぶれい…



百年もたつと言葉も  
ふえるし…外来語も…

対応した印の  
染料を作らなきゃ…



とりあえず  
外を歩いてみよう

印が導いて  
くれるはず…



うまくいったか  
まずは自分でためして  
みましょうか

今の子の理解も  
できるでしょうし…



…なんだか  
人気の少ない道に  
行くみたい…

だれかに  
出会うものでは  
ないのかしら…?



んー…墓地の  
近くでしょうか

こんな所に  
なにが…



結構歩いたけど…  
ここどこかしら



んっっ？

んっ！！



なっ…なにを  
するんですっ！

へへっわかんだろっ  
挿れるぞっ



いいから  
乗んだよっ

んっ！！

オラっ乗れっ！



っ…!  
やめてくださいっ!!  
やめてっ!!

チッあばれんなっ

っああっ  
いやあああっ!!

オラ挿ったあ!

ああ? 痛いわけあるかよ  
こんだけ濡れててよお

えっ…? うそっ  
濡れてるわけ…っ

いたいのお…っ!

いたいっ…!  
ぬいて…えっ!

おっ大人しくなったなっ

さあ…

…わすっ

浮いた…

紙の蝶が  
浮きました!

おめでとう  
ございます

これで姫様も  
立派な魔導師  
です!

ありがとう  
ございます  
キースさまあ

おっとと

わたくし  
本当に  
嬉しいです

エルフの国の宮廷魔導師になれたので  
姫様に性的な悪戯をしてみた THE COMIC

第4話

ときまるよしひさ  
漫画 時丸佳久

【原作】磯貝武蓮  
【キャラクター原案】  
成海クリスティアーノ

ようやく本当の  
治療を施された  
ナイア様

めでたく  
魔法が使えるように  
なって大喜び

まだ  
大きな魔法は  
使えません

3年程かけて  
慣らしていけば  
神聖魔法でも  
使えるように  
なるでしょう

はいっ  
がんばり  
ます!!

本当の治療に  
かなり高価で  
貴重なマシツク  
アイテムを使っ  
てしまったが…

これも  
姫様の為…

しかしご主人の  
悪だくみは  
ここからが本番  
なのでしたニヤ





高価なマジック  
アイテムより  
もつともつと  
貴重な

このキース  
一世一代の  
大勝負！  
見せてやるぜ

それでは  
お別れです  
姫様

…お別れ？

俺の役目は  
姫様が魔法を  
使えるように  
する事…

その役目も  
今日無事に  
終わりました

以降は  
同族の魔導師に  
教わった方が  
この国にとっても  
一番良いでしょう

ですから  
さよならです

…終わり？

キース様と

お別れ？

そんな…

そんなの  
嫌ですっ



わたくしは  
キース様に最後まで  
教わりたいですっ

ずっと  
一緒に！

キース様  
じゃなきや  
嫌です!!

姫様…

…それとも  
わたくしの事が えぐ、  
お嫌いになったの  
ですか？

そんなわけ  
ないじゃない  
ですか!!

にゃららららら  
れぶかめ〜

…ご心配を  
かけると思い  
言いたくは  
なかったのですが…

例の葉の出る  
魔道具が

俺と融合を  
始めたのです

ま…  
魔道具が!?

頻繁な使用で  
失いすぎた魔力を  
俺で補おうと  
したのでしよう

伝説の魔道具  
である事を忘れ  
迂闊でした…

この魔道具に  
心を呑まれる前に  
この国を離れたい  
のです…

この国に  
姫様に危害が  
及ぶ前に！



そんなっ  
わたくしの  
せいで…!

急いで  
お医者様を…  
魔導師達にも!!

いえ…  
伝説の魔道具に  
普通の方法では  
対処できない  
です…

では  
どうすれば!?

イースクシマツク  
東方魔術道に  
清らかな乙女の  
体内で練り上げた  
魔力を使って

魔の穢れを  
浄化する魔術が  
あると聞きました

その術なら  
もしかすれば  
魔道具の侵食を  
抑えられるかも  
しれません

しかしその魔術は  
魔道具を乙女の体内へ  
挿入する危険な術…

可能性は低いですが  
俺はそれができる  
清らかな乙女を  
探そうと思います

清らかな  
乙女の体内…

…心の  
清らかな者…  
姫様のような  
方にしか…

そつえば!

キ…  
キース様

その魔術

わたくしでは  
できません  
でしょうか?

姫様の  
清らかさが  
あれば…

いえ!

そのような  
危険な事  
させるわけには  
まいません!



わたくしに  
キース様を  
助ける事が  
できるのなら

やらせて  
ください

お願いです

いいえ！  
元はと言えば  
わたくしの  
責任です

キース様の  
為ならなんでも  
やります！

それに痛みも  
伴います！！



……ありがとう  
ございます

俺はなんという  
幸せ者でしょう

……  
本当に  
よろしいの  
ですか？

はい！

わたくしも  
お役に立てて  
嬉しいです



やったぜ！

姫様！

かつて彼が在籍した  
「死霊の夜明け団」の  
魔導師達は  
口を揃えてこう言った

ヤツの心は  
ゾンビより  
腐ってる

キース様！

そう……  
ご主人の辞書に  
「良心の呵責」  
などという言葉は  
ありませんの  
ですニヤ





# 魔剣士 シネ

乙女穢されし戦場

【第6話】魔導女王、墜つ

原作/まくらカバソフト

小説/酒井仁

挿絵/桐島サトシ

聖王の世継ぎを産ませるべく、  
毎夜肉宴が催される！



1

どうしてこんなことになったのか。彼にはまるで理解できなかった。だがいま目の前で、大切な娘たちが複数の男たちに辱められているのは、まぎれもない現実だった。

「おらおら、もう一発中に出すぞ！」  
「いやあ……もう、やめて……」

男たちは剣で武装しており、ただの中産階級の商人である彼に、抵抗する術はなかった。

使用人は剣で脅されて逃げ出し、彼自身抵抗する間もなく殴り倒され、胸元は噴き出した鼻血で真っ赤だ。

「もつと舌を使うんだよ、おらあ！」  
十八になる下の娘の口に、赤黒い肉棒が突っ込まれ、激しく出し入れされている。床に押し倒され、男にのしかかられている姉は二十二で、今年結婚を控えている。

「お、お願いだやめてくれ……あんたら、義勇軍じゃないのか」

「ああそうさ、俺たちやあのグスタフ王をぶつ倒した正義の義勇軍だ」

涙ながらに訴える父親をせせら笑うと、男の腰がぶるぶると震える。

「おう、おう……これだけ犯りまくりや生娘でもずいぶん具合が良くなってきたな」

「ううっ、ダニエル、ダニエル……」

婚約者の名を口にする姉の顔は、涙でぐしゃぐしゃ、しかし無法な男たちにとつてそれは、いつそう興奮を煽る材料でしかない。

グスタフ王の暴虐に対し、聖王を擁した義勇軍、反乱軍が首都ダイヤモンドシティに攻め上がってきたことは彼も知っていた。

(アレス將軍の命令で、略奪行為など一切行われていなかった、なのはどうしていまさら)

庶民に高い税を課すグスタフ王の評判は、たしかに良くなかった。もし本当に聖王が復活したのなら、もう少しよい治世をしてくれるのではないか、そんな期待もあったのだ。

それなのに。

(これでは山賊と同じじゃないか)  
目の前の悪夢が早く終わってほしいと願う彼の期待も空しく、見張りをしていた別の兵士が顔を覗かせる。

「おい、早く交代しろよ！俺たちや脱走兵なんだぜ」

「へへ、わかっているさ。おら、ちゃんと飲むんだぜえいっ」

「んぐううう……」

妹の頬を掴んだ男が、陰茎を根元まで突き入れ、娘の喉に汚液を注ぎ込んでいく。げほげほと咳き込む少女の顔に、男は無情にも体液まみれ唾液まみれの肉棒をなすりつける。

「やつと俺の番か。俺は後ろからが好きなんだ。おら、ケツを上げろッ」

少女の尻を蹴りあげる兵士に、少女は泣きじゃくりながら従う。幾度となく陵辱され、赤く染まった尻肉を乱暴に掴むと、男はそそり立った凶器をずぶりと乙女の花弁にねじり込む。

「いぎいい……っ」

犬のような格好で犯される妹を、姉はもはや放心の表情で見つめている。股間からは大量に注がれた白濁が噴きこぼれ、そこにもう一人別の見張り役が近づいて、陰茎を取り出す。

「ひひひ、入れるぞいれるぞ……」

諦めきつた顔で肉棒が入られるさまを見つめていた姉の目に、きらめく光が飛び込んだ。

「エッジ……ラッシュツツッ！」

稲妻のような剣光に襲われ、男がぎやあと叫んで顔と股間を押さえる。

突然の乱入者が剣を持った少女だと知ると、男たちはたちまち色めき立ち、股間丸出しのまま剣に手を伸ばす。

「やあつ、はああつっ！」

しかし、少女の動きは素早かった。黄金のツインテールを揺らし、右に左に男たちを牽制しつつ、流れるような動きでたちまち圧倒する。

「な、なんだこの小娘ッ、強エツ」

「あんたらみたいな雑魚に、聖剣技を使うまでもないわ。まだやる気？」

「あんたまさか、リ、リーネ女王！」

少女の正体に気付いた元義勇兵たちが震えあがる。ストームランスの女王にして無双の剣の使い手。その強さはあの將軍アレスにも匹敵するという。

「一般市民への略奪行為は厳罰つてこと、知らないはずはないわよね！」

リーネの剣幕に押されつつ、男たちは卑屈な笑みを浮かべる。

「けっ、何が義勇軍だ！グスタフ王

も、聖王までおつ死んじまつたら、この国ももうおしまいさ！」

「ク……」

聖王ルートヴィヒが暗殺者の手にかかって命を落とし、まだ五日と経っていない。なのに既に末端の兵にまでその噂が広がっている……リーネは悔しそうに唇をかんだ。

「俺たちや気楽な海賊が野盗にでも戻らせてもらうぜ、じゃあな！」

敵わぬと見てか、脱走兵たちは逃げ出していく。リーネは同行していたストームランスの兵士に後を託すが、負傷した商人と二人の娘たちは放心状態のままだった。

「リーネさま、パロックさまより直ちに戻るよう」と

「ええ、わかっているわ」

聖陵ホーリーヒルでルートヴィヒが殺され、そのうえヒツピア軍襲来の報にパロックは浮足立った。

リーネたちを護衛にダイヤモンドシティに戻ると言いだして聞かないパロックに、アレスはわずかな手勢と共にノースブリッジの砦でヒツピア軍を迎え撃つことにしたのだ。

(無事でいて、アレス……！)

ノースブリッジは攻めるに難い要塞ではあるが、籠城が長引けばアレスたちが不利になるのは明白だ。先ほどの脱走兵を見てもわかるように、義勇軍内部にも不穏な空気が漂っている。

(ストームランスやヘステリア、アウラ神国はともかく、諸侯たちはルート



ヴィツヒさまを喪ったショックから立ち直れない……どうすれば)

せめてアレスたちの下に援軍を送るよう、バロックに進言してみよう。そう思うリーネを出迎えたのは、喜色満面の諸侯たちだった。

「リーネ女王、喜ばしい知らせですぞ」「ど、どうしたというのですか」

三大国以外の領主諸侯たちは、ルートヴィツヒの檄文によって蜂起した者たち。聖王亡き後の意気消沈ぶりからは想像できない喜びようだ。

「バロックさまが！ バロックさまに聖王の御徴が現れたのです!!」

「これでハイランドは救われた!」

「聖王バロックさま万歳!!」  
そんなバカな……と大急ぎで駐屯地に戻ったリーネは、聖王万歳の声に沸き上がる諸侯や兵士たち、その中心でこれ見よがしに輝く聖王の証を見せつけるバロックの姿を見た。

「リーネさま」

「ベアトリス、シンシア! これはいいたいどういふことなの!?!」

「おお、リーネよ戻ったか。まったくお前というやつは、ワシの護衛という大任を放り出して脱走兵の討伐など……だが、この聖王に免じて許そう」

金髪的美剣士の姿を認めるや、肥満気味の男はぐいとリーネの肩を抱き寄せ、兵士たちに手を振って応える。(さっきの確かに聖王の証。まさか本当に?)

ルートヴィツヒの死を忘却の彼方に

追いやったように、一行は新たな聖王バロックと王城に向かおうとする。

それよりノースブリッジに援軍をと言いかけるリーネを押しとどめたのは、ベアトリスとシンシアだった。

「リーネさま、いまはみな聞く耳をもたないでしょう。それにバロックさまの側近の方が『早急に聖王の後宮を作るべき』と言いだして」

アウラ神国の巫女王の口から出た単語に、リーネは呆気にとられる。

「こ、後宮?」

後宮とは王妃や側室を幾人も囲い、王の世継ぎを生ませるための施設だ。だが今はヒツピアが国境まで攻め込んでいる事態だというのに……。

「けれど、ルートヴィツヒさまのことを思えば、皆さまのお気持ちも理解できます。もしバロックさまの御身にもしものことがあれば、今度こそ」

「ベアトリス……でもこうしているあいだにもアレスたちが」

「ええ。シンシアさまと共に、援軍の要請をバロックさまに進言しておきました。リーネさまはできるだけ精鋭を選出してくださいますか」

「そ、そうすればきつとアレスさんのお力になれると思うんです!」

歯がゆいが、今はそれが最善策だろう。ベアトリスもシンシアも、前線に残してきたアレスや自国の兵たちが心配なのは同じなのだ。リーネにもそれはわかっていた。

「あれは……?」  
近頃、ハイランド王城内にはわかに騒がしい。新たな聖王となったバロックのために、後宮が急ピッチで建設されているのだ。

バロックの実妹である女騎士クロエは、建設の指揮を取っている男に目をやって、少し眉をひそめる。

(彼は長年の兄さまの側近……けれど最近雰囲気が変わったような) 後宮作りを諸侯に積極的に働きかけたのも彼だった。以前はずっと控え目な人柄だったはずだが……と訝っていると、テラスで物憂げに佇むリーネとベアトリスの姿があった。

「みんなどうかしてるわ! いまもアレスたちがヒツピア軍を食い止めているっていうのに、なにが後宮よ!」

「リーネさま……しかし、聖王さまにとつての世継ぎ作りは大切なお役目。リーネさまもおわかりでしょう」

「……………」

聞くともなしに二人の会話を聞いてしまつたクロエは、複雑な心境だ。

正直、バロックが聖王にふさわしい器だとクロエは思っていない。政治的野心こそないが、兄は浪費と処女にしか興味のない好色漢だ。

名実ともに聖王となつたからには、兄バロックは身分が高く、若く美しい娘に目をつけることだろう。若き將軍の身を案じる金髪的美少女の胸の内を思うと、クロエは一人胸を

痛めるのだった。

しかし、クロエやリーネの心配をよそに、後宮は順調に建設され、贅を尽くした内装で飾られていった。

その間、ハイランドの同盟三国の代表者——リーネ、ベアトリス、シンシアの三人は、聖王の統治の下に大陸に平和をもたらす——すなわち聖王の御心に沿い、世継ぎを孕むための心得を学ばされた。

リーネはわざと抜け出しては剣の稽古に励み、あるいは伝令を出してノースブリッジの様子を探らせていたが、後宮は完成し、式典と祝宴に王城は大いに沸き立った。

完成したばかりの後宮の寝室で、バロックはひとり酒杯を傾け、思案を巡らせていた。

「後宮も完成し、そろそろ頃合い……しかしあのじゃじゃ馬のリーネには少々手間取りそうだな。いちばん素直にワシの言うことを聞きそうなのは、やはり……くつくつくつ」

今日、自分一人が後宮に呼び出されたことの意味を、ヘステリア女王ベアトリスは理解していた。

なぜなら、今日のベアトリスはいつもの緑を基調とした美しいドレス——強化服を身につけてはいない。渡されたのは身体のラインがくつきり透けて見える薄絹のナイトドレスと、ショーツのみ。

(どうとう……このときがきてしまつ

たのですね)

ハイランド軍の侵攻を受け、将軍オ  
ーウェンやハイランド兵に辱めを受け  
たことを、ベアトリスは忘れてはいな  
い。そしてその汚名を雪いでくれたの  
は、アレスとルートヴィヒであるとい  
うことも。

だが、いまはルートヴィヒはなく  
アレスもここにはいない。

(この国を、大陸を平定するには聖王  
のお力が必要なのですわ)

そのために魔導大国の女王として何  
を為すべきか、答えははっきりしてい  
るはずなのに。

まだあどけなさささえのこる美少女の  
心には、最前線で剣を振るい、侵略か  
らこの国を救うべく死力を尽くしてい  
るであろう、青年の姿がぬぐい去れな  
かった。

(アレス……あなたならきつと、わか  
つてくれるはず)

ぎい……と扉を押し開くと、そこは  
シンプルながら様々な色のカーテンで  
飾られた寝室であった。

装飾品の類は少なく、部屋の大半を  
占めている大ベッドは大人が五、六人  
乗ってもまだ余裕があるほど巨大なも  
の。石造りの柱の奥に扉が通じていて、  
そこから使用人が酒や料理を運ぶよう  
になっている。

「あん……んふう……」

「べろ、びちゃ……んくう……」

室内に響くのは舌遣いの濡れた音と、  
女の甘い二つの喘ぎ声。ピンクと水色

のロングヘアが頭の動きに合わせて揺  
れている。

少女たちは二人とも一糸まとわぬ全  
裸。淫らに動く少女たちの舌が這って  
いるのは、猛々しくそそり立った肉棒  
だった。太い幹には血管が浮き出て、  
先端はまるで金属のようになって輝い  
ている。

「あふう、聖王さまのおちんぽおいひ  
いれすう」

「ふふ、人妻の舌遣いも存外悪くない  
ものだな。それ玉袋も舐めるのだ」

二人の娘たちに陰茎をねぶらせてい  
るのは、大ベッドに悠然と腰をおろし  
た中年男。豪奢な上衣をまとっている  
が、下半身は全裸だ。

サブリナが陰囊を口に含むと、ピン  
ク髪のウェンディが亀頭の周辺を舌で  
くすぐる。

「パロックさまの先走り汁、しょっぱ  
くてとても高貴なお味ですわ」

彼女たちはいったいどれくらい、こ  
うやって淫らな奉仕を続けているのだ  
ろうか。二人とも汗びっしょりだが表  
情には喜びと快楽が満ちている。

さらにもう一人、床でぐったり倒れ  
ている三つ編みの少女ドロシーは、既  
に何度か気をやつたらしい。

「どうした、もつと近くに寄るがいい  
ベアトリス。ワシがオーウェンの下で  
囚われの憂き目にあっている時も、お  
前はこうしてワシを慰めに来てくれた  
ではないか」

「あ、あれは」

あれはヘステリア公国がオーウェン  
率いるハイランド軍に攻め落とされた  
ときのこと。オーウェンは保護の名目  
でパロックを拘束し、彼を満足させる  
ためにベアトリスに性的奉仕を強要し  
たのだ。

「あのときはオーウェン将軍に逆らう  
ことができず……」

「わかつておるわかつておる。かつて  
はヘステリアの王位をお前と争った男  
とはいえ、グスタフなどの走狗になり  
果てた、浅はかで高慢な若造じゃ。さ  
ぞやお前の意に反し、ひどい扱いをさ  
れたのであらう」

す……とパロックの分厚い手がベア  
トリスの手を握って抱き寄せる。

「あ……」

アレスのような逞しさや、ルートヴ  
イヒの持つ気品とは違うが、パロッ  
クには独特のオスとしての存在感があ  
った。ぞくり、とベアトリスの背中を  
電気のような感覚が走り抜ける。

「おお、前にも増して乳も尻も豊満に  
なったことよな。生娘でありながら、  
もう母乳が搾れそうなほどではないか、  
ええ？」

「お、お戯れを……あつ」

薄絹の上から、大きな手がベアトリ  
スの肉球を掴み上げた。ぐいぐいと指  
が沈むほどに揉み上げるが、痛みを感  
じるほどではない。それどころか、既  
に硬くしこったニップルを中心に広が  
る快感に、ベアトリスはわななく。

「ん、あふう……つ、パロック、さま」

「いずれこの聖王の世継ぎを孕んだ暁  
には、この乳も尻もさらに豊かに実り、  
母乳をもらすだろう。お前の身体を  
こども淫らに調教したオーウェンには、  
感謝だなわははは」

そう言つて、片方の手を尻に回すと、  
ポリウムたつぷりのヒップを撫でま  
わしてくる。ショート越しとはいえ、  
太い指を尻の割れ目の奥に潜り込ませ  
るようにされると、ベアトリスの裏門  
がきゅんと痺れる。

「お前の尻穴でもずいぶん楽しませて  
もらったな……いまだ処女の証を持ち  
ながら、なんとも淫らな女になったも  
のよベアトリス」

「おそれ、いります聖王さま……」

乳と尻を煽られ、息を荒げるベアト  
リスに刺激されたのか、サブリナとウ  
ェンディの声がねつとりと甘くなる。

「あん、あふうん……」

「おちんぽ、おちんぽもつとお……」  
少女たちはパロックの巨根をねぶり  
つつ、自らの股間に指を這わせ始めて  
いたのだ。ぴちゃぴちゃ、くちゅくち  
ゅという濡れた音に、後宮内の空気は  
いっそう桃色の濃度をあげていく。

「ひとつ座輿に聞かせてくれぬか、ベ  
アトリス。お前はオーウェンにどのよ  
うな辱めを受け、そのような淫らな身  
体になったのじゃ」

「そ、それは」

パロックの口調は、ベアトリスを責  
めているものではない。むしろ羞恥に  
口ごもる反応を楽しむそれだ。



「さ、最初に墮とされたのはウエンディとドロシーです。二人は味方の兵を人質に取られ、オーウエンとハイランド兵に囚われたのです。私が二人を救いだした時には、二人とも既に度重なる陵辱に正気を失っています」

「ほほう。ではお前は同じ女の手で籠絡されたのだな」

「二人とも私にとつては近しい者たち、彼女たちは私の敏感なところなど知りつくして……お、お乳の先やお尻など、二人がかりで責め立てられて、否応なく感じさせられたのですわ」

「ちらちらとベアトリスを見上げるウエンディの視線に、頬が熱くなる。」

「あのとこのことをわざわざ口に出すことで、ベアトリスの肌は火照り、うっすらと汗ばんでしまう。」

「二人に籠絡された私は、母国ヘステイアを裏切つてオーウエンに屈しました。彼はこうなることをすべてお見通しだったので。彼は私の処女を守ると同時に、純潔以外の部分にありとあらゆる快楽を刻みつけてやると宣言しました」

「あのとこ自分は、生まれて初めての性的快楽に我を忘れた。そして敵將軍の前に膝を折り、突きだされた勃起ペニス喜びと共に、自分からくわえこんだのだ。」

「初めてしゃぶつた男の茎の味はどうだったのだ、ベアトリス」

「先ほどとは異なり、パロックはソフトタッチで左右の乳房を揉み始めてい

た。布越しに突起物をつまみ上げ、くりくりと捏ねまわす。

「ナイトドレスの裾から差し入れられた手は太腿の付け根近くまで撫であげ、少女のふつくらした恥丘を掌で優しく揉んでくる。」

「オーウエンのちんぽは大きく……汗ばんですごい臭いでした。長い行軍で先端にはびつしりと垢のようなものがこびりつき、私はそれを舌ですべて舐め取るよう言われました」

「当然、お前はそれに従つたのだな」

「はい、そうするしかないと思ひ込んでいたのですわ。オーウエンにだけではありません。ハイランドの兵士の方々のちんぽを何本もしやぶらされ、その間もおっぱいを揉まれたり、乳首を吸われたり……ああっ」

「くりんと乳首をひねりあげられ、ベアトリスは美しい金髪を揺らして身悶える。」

「こみ上げる快感に立っていることができず、よろけた少女の肢体をパロックが抱きとめた。」

「続けるがよい。乳以外のところも黴られたのであろう」

「はい……乱暴にお尻の肉を広げられ、兵士たちが私のお尻の匂いを嗅いで興奮しました。彼らのはかわるがわる私のお尻の穴をねぶつてほぐし、やがて指で……ああ、恥ずかしいっ」

「だが、それでお前は感じたのであるう？ 名も知らぬ一般兵の指を尻穴にねじ込まれ、気持ちよくなつてしまつ

たのだなベアトリス」

「ここで『ばしいん！』と音を立てて少女の尻に平手打ちをした。それは音だけで痛みはほとんどなかったが、ベアトリスはびくつと大きく肩を震わせ、その瞳は明らかに潤んでいる。」

「だが当然、指だけで済んだはずはあまるまい。ワシのマラを受け入れたお前のお尻の心地よさ、いまもしつかり覚えておるぞ」

「ああああ……」

「ベアトリスの脳裏に、パロックの巨根の感触が鮮やかによみがえる。あのとこ、彼女はオーウエンの命令でパロックの機嫌取りの接待をしていた。」

「前の純潔以外なら、どんなことでも受け入れ、パロックを骨抜きにするよう命じられていたのだ。」

「(なのに、私はパロックさまのちんぽにいつしか我を忘れて)」

「パロックには政治的野心も、一国の王としての器もないかもしれない。」

「しかし、一匹の雄としての食欲さ、雌を従え、屈服させる精力だけは間違いないなく抜きん出ている。他ならぬベアトリスの、女としてのいちばん深い部分がそれを認めている。」

「オーウエンを始め……何人、何十人もの兵士が、私のお尻を犯しました。」

「私は処女でありながら、お尻にちんぽをねじ込まれてよがる、淫らな女になつてしまったのです。けれど……」

「けれど、なんだ？」

「リスは唇を震わせる。」

「他の、どんなおちんぽよりも、パロックさまのデカちんぽがいちばん気持ち良かったです！ いま思い出しただけで、わたしは……っ」

「にやりと淫猥な笑みを浮かべたパロックのオス臭が、いつそう強くなったような気がした。隆々とそびえ立っていた肉棒がぶるり震えたかと思うと、それはむくむくとさらに太さと長さを増したのだ。」

「ああ、パロックさまあつ」

「股間を弄りながら陰茎をしゃぶつていたサブリーナが、感極まつたように身をのけぞらせる。」

「続けてウエンディも声にならぬ喘ぎ声を漏らし、腰をがくがく震わせながらその場に崩れ落ちる。パロックの肉棒……いやもはや肉柱とも呼ぶべき超巨根、その先端に滲む透明な汁の芳香に当てられたのだ。」

「その圧倒的な牡の香りに。ベアトリスの内腿にも、いく筋もの蜜液が伝い落ちていた。いまだ汚れを知らぬはずの処女の聖地は、淫らなラブジュースで溢れかえっている。」

「聖王……パロックさま……どうか、私の純潔を聖王さまに捧げる榮譽をお与えください……」

「肉欲に染まつた眼差しでパロックを見つめながら、ベアトリスは左手で乳房を、右手で股間を弄っていた。」

「一国の女王にあるまじきはしたない行為も、まったく気にならない。むしろ

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**